

日野市生物多様性地域戦略 (骨子案)

2017.5.10

本資料はこれまでの協議内容をもとに、章・節の構成などを骨子案としてお示ししたものです。

そのため、章・節により本文の書き込みの度合いは異なります。本委員会では、主に目次と章・節の構成についてご確認ください。

◆新しく作成した項目

- ・日野市の生物多様性の概要 (P1～3)

◆今後書き込む項目

- ・目標年次の設定 (P37)
- ・重点プロジェクトの設定 (P46)
- ・推進体制 (P44)
- ・進行管理 (P45)

目 次

1. 策定の背景.....	1
1.1 生物多様性とは.....	1
1.2 生物多様性に関連するの動向.....	4
1.2.1 国内外の動向.....	4
1.2.2 東京都の動向.....	4
1.2.3 日野市の動向.....	4
1.3 地域戦略策定の目的.....	6
2. 現状と課題.....	7
2.1 社会環境.....	7
2.1.1 位置と面積.....	7
2.1.2 人口.....	7
2.1.3 産業構造.....	9
2.2 自然環境（水とみどり、地形など）.....	10
2.2.1 地形.....	10
2.2.2 水環境（河川・用水・湧水）.....	11
2.2.3 みどり.....	12
2.3 土地利用の変遷.....	14
2.4 日野市の生きもの.....	19
2.4.1 日野市全体の生物相.....	19
2.4.2 生息環境区分ごと生きもの.....	20
3. 基本的事項.....	37
3.1 位置づけ.....	37
3.2 対象区域.....	37
3.3 計画期間.....	37
3.4 基本理念.....	38
3.5 基本方針.....	38
4. 生物多様性地域戦略の取組み.....	39
4.1 取組みの体系.....	39
4.2 主体の整理.....	40
4.3 それぞれの取組みについて.....	41
4.3.1 取組みの方向：1-1. 日野の未来を創る人を育成（仮）.....	41
4.3.2 取組みの方向：2-1. 拠点を活用した生物多様性の情報整理・発信（仮）.....	42
4.3.3 取組みの方向：2-2. 自然体験活動の推進（仮）.....	42
4.3.4 取組みの方向：3-1. 多様な主体が連携できる体制構築（仮）.....	42
4.3.5 取組みの方向：4-1. 市民調査による生物多様性の実態把握（仮）.....	42
4.3.6 取組みの方向：4-2. 生物多様性豊かな環境を継承する活動の推進（仮）.....	42
4.3.7 取組みの方向：5-1. 自然と人が支え合うまちづくり（仮）.....	42
4.3.8 取組みの方向：6-1. 自然環境の保全（仮）.....	42

4.3.9 取組みの方向：6-2. 生きものを育む環境の創出と質の向上（仮）	42
4.3.10 取組みの方向：7-1. 人と生きものが共生するための外来種・有害鳥獣対策（仮）	42
4.4 重点プロジェクト	43
4.4.1 重点プロジェクト 1.....	43
1.1.1 重点プロジェクト 2.....	43
1.1.2 重点プロジェクト 3.....	43
1.1.3 重点プロジェクト 4.....	43
5. 推進体制と進行管理	44
5.1 推進体制.....	44
5.2 進行管理.....	45

1. 策定の背景

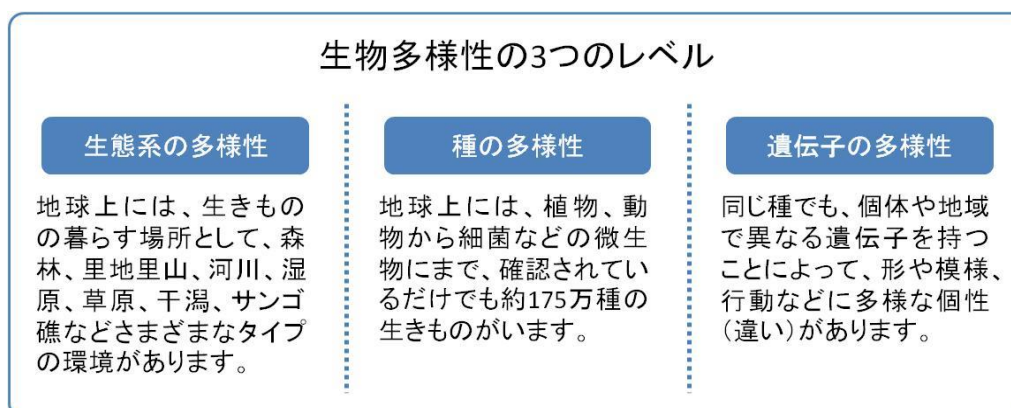
1.1 生物多様性とは

私たちが暮らす日野市は、市域の北側を多摩川、中央部を浅川が流れており、湧水が多数点在しています。さらに、日野台地や多摩丘陵などの起伏に富んだ変化の多い地形と、そこで暮らす人の利用によって、さまざまな環境を作り出しています。そして、多様な環境に多様な生きものが生息し、豊かな生態系が育まれています。

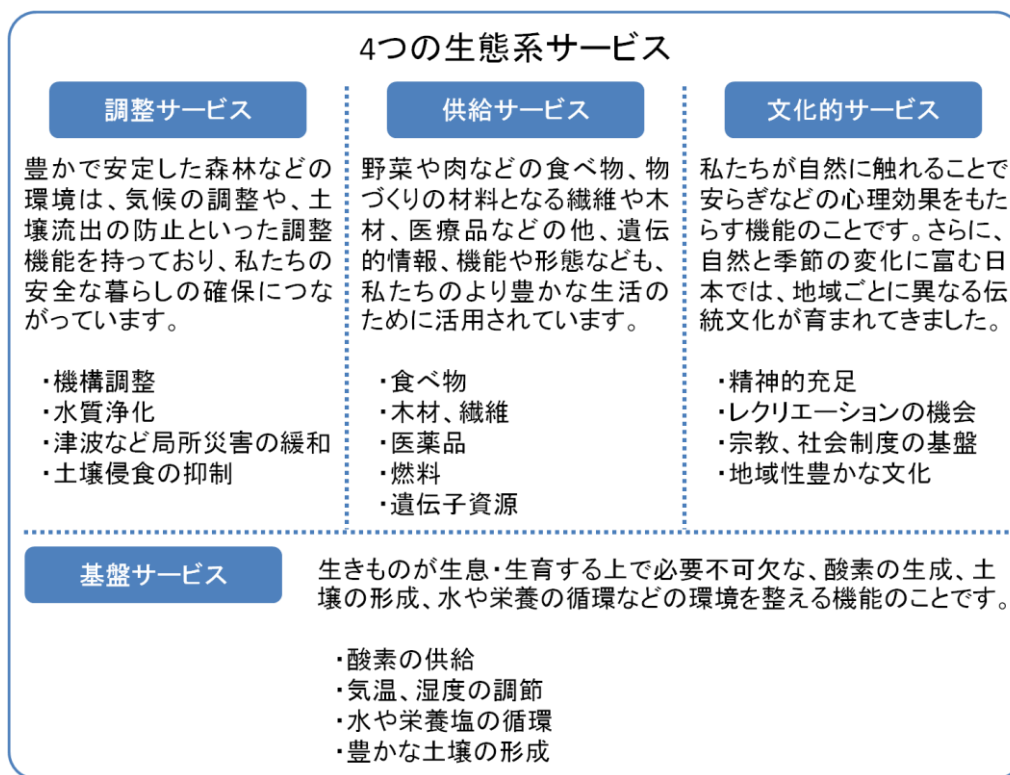


生きものは、私たち人間のように、同じ種であってもそれぞれに個性を持っています。さらに、他の生きものとの間にも「食うー食われる」の関係や「共生」「寄生」などのつながりを持ちながら、その環境に応じた生態系を形成しています。

このような、多様な生きものの繋がりや違いのことを、「生物多様性」といい、生物多様性には「遺伝子の多様性」、「種の多様性」、「生態系の多様性」という3つのレベルがあります。



私たちの暮らしはさまざまな生きものや環境に囲まれており、これらの多様な生態系からもたらされる、水や食べ物、気候の安定などの恵み（生態系サービス）によって支えられています。これらの生態系サービスは大きく 4 つに分類することができます。



地球が 40 億年という長い時間をかけて育んできた生物多様性は、私たちの生活に欠かすことのできない恵みをもたらしています。しかし、生物多様性は人間活動や地球環境の変化などにより、近年その損失が進んでおり、多くの生きものが絶滅の危機に瀕しています。

生物多様性の4つの危機

《 第1の危機 》

開発や乱獲による種の減少・絶滅、生息・生育地の減少

鑑賞や商業利用のための乱獲や過剰な採取、埋め立てなどの開発によって生息環境が悪化・破壊し、生きものの数と種類、その生息環境が減少しています。種の絶滅のスピードは自然状態の約100～1,000倍にも達するといわれています。

《 第2の危機 》

里地里山などの手入れ不足による自然の質の低下

生活様式の変化で薪などの利用がなくなり、二次林や採草地においての人の管理がなくなった地域が増えています。このことによる環境変化で、里地里山の動植物が絶滅の危機にさらされています。また、シカやイノシシなどの個体数増加も地域の生態系や農作物に被害を与えています。

《 第3の危機 》

外来種や化学物質などの持ち込みによる生態系のかく乱

外来種による在来種の捕食、在来種とのエサ資源や生息場所の競合、交雑による遺伝的な攪乱などが日本各地で生じています。また、動植物への毒性を持つ化学物質による生態系への悪影響も懸念されています。

《 第4の危機 》

地球環境の変化による危機

地球温暖化や酸性雨、オゾン層の破壊などの問題は国境を越えた大きな課題です。温暖化により平均気温が1.5～2.5度上がると、高山帯の縮小や、海面温度の上昇などにより、絶滅のリスクが高まるといわれています。

日野市においても、生物多様性の4つの危機に該当する課題が発生しています。例えば、丘陵地・農地の宅地化や河川整備、雑木林の荒廃、水田の減少は生きものの生息環境の減少に繋がります。また、多摩川河川敷のハリエンジュ・シナダレスズメガヤ、ガビチョウなどの外来種による生態系のかく乱など、日野市の豊かな生態系に悪影響を及ぼす恐れがあり、見過ごすことができません。

私たちが、自然と共に育んできた豊かな生態系やその恩恵を、次の世代に受け継いでいくために、自然や生きものとの共生のあり方を見直す必要があるといえます。

日野市 —生物多様性の課題—



《 第1の危機 》

開発による生きものの生育・生息地の減少

コンクリート製の用水路は水草が生えにくい、魚などの移動を妨げるなど、生きものの住みにくい環境です。

《 第2の危機 》

手入れ不足による自然の質の低下

薪などの利用がなくなり、人の管理により維持されていた雑木林などの環境が荒廃しています。

《 第3の危機 》

外来種の持ち込みによる生態系のかく乱

市内の河川敷で増えているシナダレスズメガヤは、他の植物の生育を阻害するなどの系への影響が懸念されています。

《 第3の危機 》

外来種の持ち込みによる生態系のかく乱

ガビチョウは、エサや生息場所の競合など、数が増えることで在来種に影響を与えている可能性が指摘されています。

1.2 生物多様性に関連するの動向

このような生物多様性の問題の解決に当たるため、日本をはじめ世界各国で取り組みが進められています。

1.2.1 国内外の動向

平成 4 年にブラジルのリオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」では「生物多様性条約」が採択され、初めて生物多様性に関する国際的な取り決めが定められました。

また、平成 22 年には「生物多様性条約第 10 回締約国会議」が愛知県で開催され、生物多様性の低下を止めるための世界的な取組みの目標である「愛知目標」が採択されました。

日本では平成 5 年に「生物多様性条約」を締結し、それに基づき平成 7 年には「生物多様性国家戦略」を策定しました。生物多様性国家戦略はその後、3 回の改定を経ており、平成 24 年には「生物多様性国家戦略 2012-2020」が策定されています。

平成 20 年には「生物多様性基本法」が制定され、都道府県や市町村においても、生物多様性国家戦略に基づき、“生物多様性地域戦略”を策定することが努力義務として定められました。全国の基礎自治体においては、現在 55 の自治体が策定済みであり（複数自治体による協働策定含む）、都内では 11 の自治体が策定済みです（平成 28 年 12 月 31 日現在）。

1.2.2 東京都の動向

東京都では、昭和 47 年に「東京における自然の保護と回復に関する条例（自然保護条例）」を制定し、既存の緑地を保全する手法として、保全地域制度等を創設しました。平成 24 年には東京都における生物多様性地域戦略である「緑施策の新展開～生物多様性の保全に向けた基本戦略～」を策定しました。

1.2.3 日野市の動向

日野市では、世界的に生物多様性に関連する枠組みが生まれる前から、清流条例の施行や水生生物調査の取り組みが行われており、水やみどりといった自然に対して、市民の関心が高く、市も関連する活動を実行していました。

さらに、平成 22 年には「第 2 次環境基本計画」を策定しており、背景として生物多様性に関連する動向を示した上で、望ましい環境像として「私たちの継承した自然環境を保全し、次の世代に引き継ごう」と定めています。

表 1-1 生物多様性に関する日野市と国際社会・国・都の動向

年	世界・日本・東京都の動向	日野市の動向
昭和 47 年 (1972 年)	・【都】「東京における自然の保護と回復に関する条例 (自然保護条例)」制定	
昭和 51 年 (1976 年)		・「日野市公共水域の流水の浄化に関する条 例」(清流条例)施行
平成 2 年 (1990 年)		・「水生生物調査」開始
平成 4 年 (1992 年)	・【世界】環境と開発に関する国連会議(地球サミット) 「生物多様性条約」採択 ・【国】「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存 に関する法律」制定	
平成 5 年 (1993 年)	・【国】「生物多様性条約」締結	
平成 7 年 (1995 年)	・【国】「生物多様性国家戦略」策定	
平成 13 年 (2001 年)		・「第四次日野市基本構想・基本計画(日野いっ ぷろ 2010)」策定 ・「みどりの基本計画」策定
平成 14 年 (2002 年)	・【国】「新・生物多様性国家戦略」策定	・「用水守制度」開始
平成 16 年 (2004 年)	・【国】「特定外来生物による生態系等に係る被害の 防止に関する法律」制定	
平成 17 年 (2005 年)		・「環境情報センターかわせみ館」開設 ・「日野市観光基本計画」策定
平成 18 年 (2006 年)		・「清流保全-湧水・地下水の回復と河川・用水 の保全-に関する条例」改定 ・「日野市清流保全-湧水・地下水の回復と河 川・用水の保全-に関する条例」制定
平成 19 年 (2007 年)	・【国】「第 3 次生物多様性国家戦略」策定	
平成 20 年 (2008 年)	・【国】「生物多様性基本法」制定	
平成 22 年 (2010 年)	・【世界】生物多様性条約第 10 回締約国会議 (COP10) 「愛知目標」採択 ・【国】「生物多様性国家戦略 2010」策定	・「第 5 次日野市基本構想・基本計画(2020 プラ ン)」策定 ・「第 2 次日野市環境基本計画」策定
平成 24 年 (2012 年)	・【国】「生物多様性国家戦略 2012-2020」策定 ・【都】「緑施策の新展開～生物多様性の保全に向 けた基本戦略～」策定	
平成 26 年 (2014 年)	・【国】「特定外来生物による生態系等に係る被害の 防止に関する法律」改定	・「第 3 次日野市農業振興計画・アクションプラ ン」策定
平成 27 年 (2015 年)	・【都】「東京都環境基本計画 2016」策定	

1.3 地域戦略策定の目的

日野市は、市域の北側を多摩川、中央部を浅川が流れ、また市内各所に用水路が広がっているほか、湧水も多数点在する等、「水の郷」と呼ぶにふさわしい環境にあります。

また、多摩丘陵や崖線等、自然度の高い緑や水田・畑等の農地が市内に点在しており、首都近郊に位置しながらも比較的豊かな生態系が維持されています。

かつては、人はこうした身近な自然環境の中で食住の糧を得て、そこに暮らす生きものと共生しながら暮らしてきました。このような中、幸いにも日野市においては、都市部では失われつつある自然環境や生物多様性は、ふるさと日野を愛する市民の皆さんの地道な保全活動と、市による多年にわたる環境施策の積み重ねによって現在の景観を維持しています。

しかし、これらの取組みにもかかわらず、都市化による緑被率や耕地面積、生産緑地面積の減少や水路の廃滅に歯止めがかからない現状があります。

このたび策定する生物多様性地域戦略は、これまでの日野市の取組みの成果を総括すると共に、「緑と清流のまち ひの」を持続可能なまちづくりの根幹に据え、将来にわたる日野市の目指すべき生物多様性の姿とそれを実現するための具体的な取組みを示し、私たちが先人から引き継いだこの身近で大切な自然環境を次の世代にしっかりと伝え、どこにも類似しない日野らしいまちづくりを目指す計画として位置付け、運用していくものです。

2. 現状と課題

2.1 社会環境

2.1.1 位置と面積

日野市は東京都のほぼ中央に位置し、東京駅から 30km 圏にあります。東西 7.59km、南北 5.85km で、東西にやや広がった形をしており、面積は 27.53km² です。

市内には JR 中央線が通っており、日野駅から新宿駅までは約 40 分でアクセスできる立地です。



図 2-1 日野市の位置

引用：日野市の現状と課題(平成 22 年)

2.1.2 人口

日野市の人口は、市制施行の 1960 年代から 1980 年代にかけて急増しており、東京全体の爆発的人口増の受け皿となっていました。昭和 50 年（1975 年）からは増加率が徐々に減少し続け、一時的に人口減少することもありましたが、平成 12 年（2000 年）以降は再び人口が増加しはじめました。平成 27 年（2015 年）の時点で人口は 186,283 人です。

全体的な傾向としてまだ人口の微増が続いている状態であることから、住宅需要によるさらなる宅地化が懸念されます。

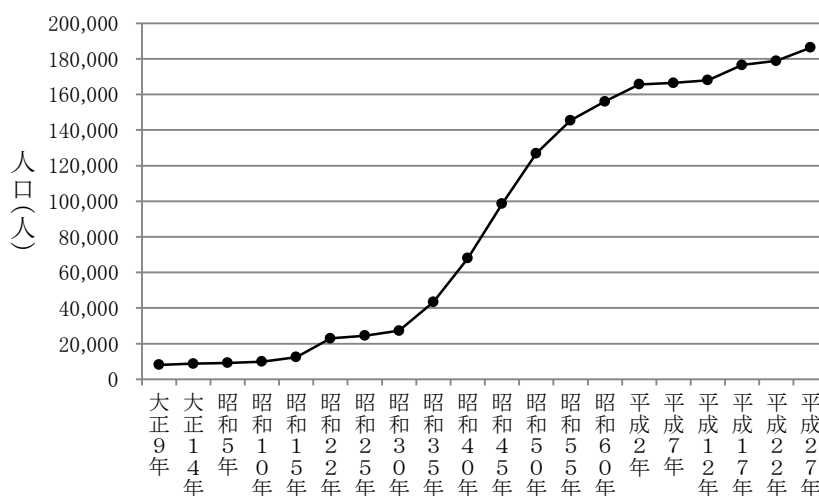


図 2-2 日野市の人口推移

出典：総務省統計局 国勢調査

現在の日野市の人口は微増傾向ですが、平成 37 年（2025 年）をピークに減少局面に入ることが予想されています。年少人口・生産年齢人口は既に減少局面に入りつつありますが、老年人口は平成 62 年（2050 年）まで増加し続け、高齢化率が高まり続けると推測されています。将来の人口割合の構成から、今後は高齢化による担い手不足が進行すると考えられます。

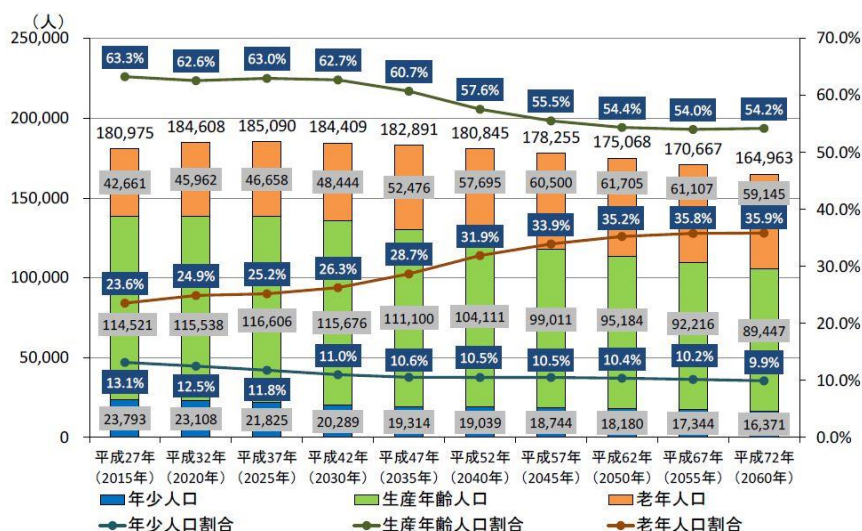


図 2-3 日野市の人口の将来推計

引用：日野市人口ビジョン(平成 28 年)

家族類型別に一般世帯数をみると、平成 7 年以降、単独世帯の比率が最も高くなっており、特に高齢単独世帯が増加傾向となっています。一方、その他の夫婦のみ世帯と夫婦と子供世帯は減少傾向で、子育て世代の比率の減少が見られます。子育て世代に魅力を感じてもらい、受け入れられるまちを目指すことや、高齢単独世帯をサポートする取組みは、今後の課題です。

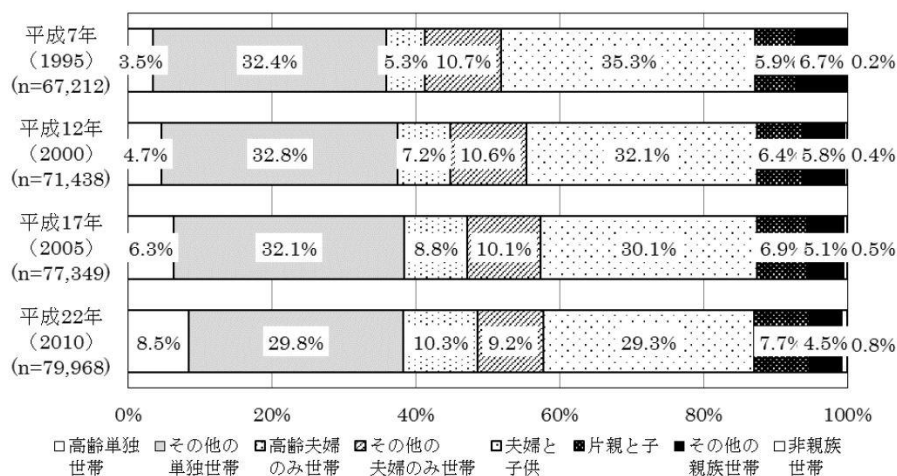


図 2-4 日野市の家族類型別一般世帯数

引用：日野市住宅マスタープラン(平成 27 年)

2.1.3 産業構造

平成 22 年時点での 15 歳以上従業者数の合計は 81,901 人でした。産業 3 部門の就業者数と就業者割合は図 2-5 のとおりです。第 1 次産業の就業者割合は 1%未満であり、非常に少ない構成比率となっています。

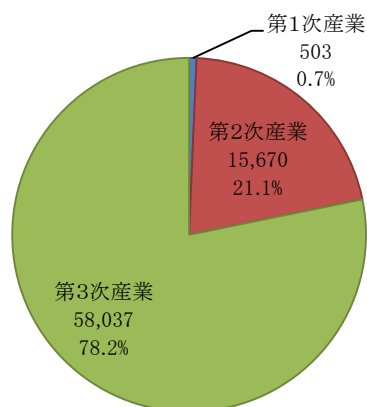


図 2-5 日野市の産業別就業者の割合

出典：総務省統計局「国勢調査」（平成 22 年）

2.2 自然環境（水とみどり、地形など）

2.2.1 地形

日野市の地形は北西部の日野台地、南部に位置する多摩丘陵、多摩川と浅川の周辺に広がる沖積地（低地）、日野台地と沖積地の境界である崖線、多摩川と浅川に代表される河川の5つに大きく分けられます。この5つの地形が市域に存在することは、日野市の特徴であり、自然環境の豊かさや生物多様性の基盤となっています。

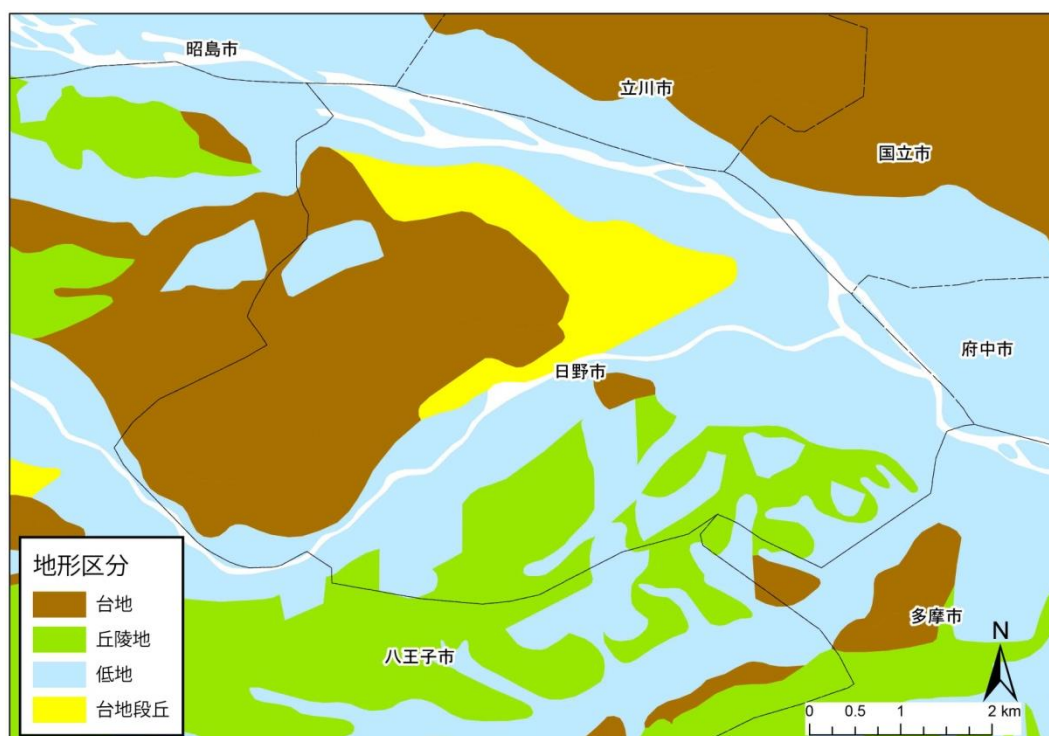


図 2-6 日野市の地形区分

出典：国土交通省 国土情報課 20 万分の 1 土地分類基本調査 地形区分 (GIS データ)
国土交通省 国土情報課 20 万分の 1 土地分類基本調査 地形区域 (GIS データ)
国土交通省 国土情報課 国土数値情報 行政区域データ (GIS データ)

2.2.2 水環境（河川・用水・湧水）

日野市の主な河川は多摩川と、多摩川水系の浅川、谷地川、程久保川の4河川です。低地部には延長116kmの用水路が整備されており、13本の幹線用水路（日野用水上堰、日野用水下堰、川北用水、上村用水、平山用水、南平用水、豊田用水、上田用水、新井用水、高幡用水、向島用水、落川用水、一の宮用水）と黒川水路で構成されています。このような用水のある風景は、市民の生活に潤いと安らぎを与えるとともに、重要な観光資源にもなっており、平成7年には国土交通省（旧国土庁）の「水の郷100選」に選ばれています。平成13年には潤徳小学校と滝合小学校の周辺2箇所を「水辺の楽校プロジェクト」に登録し、様々な環境活動を展開しています。また、崖線の周辺や多摩丘陵の谷戸では179箇所の湧水が存在し、3箇所が「東京の名湧水57選」に選定されています。

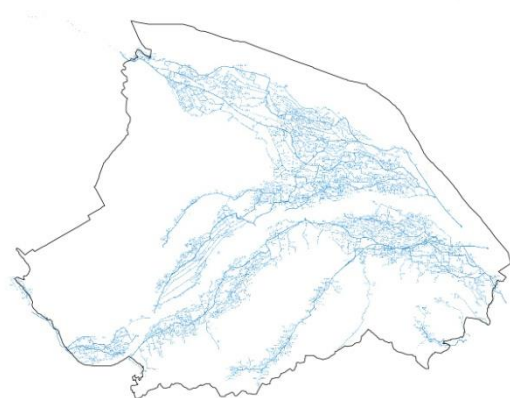
日野市ではこれらの豊かな水環境を守るために、昭和51年に「日野市公共水域の流水の浄化に関する条例（清流条例）」が制定され、用水の年間通水が実施されています。さらに、平成18年には「日野市清流保全－湧水・地下水の回復と河川・用水の保全－に関する条例」が制定され、河川や用水だけでなく湧水や地下水も含めた水辺の保全に努めています。

水のある環境は日野市の大きな特徴ですが、用水路は水田の減少に伴い利用価値が失われ、減少傾向にあるのが現状です。用水路を減らさずに、どのように新しい価値を与えて維持していくかは、これからの課題となっています。

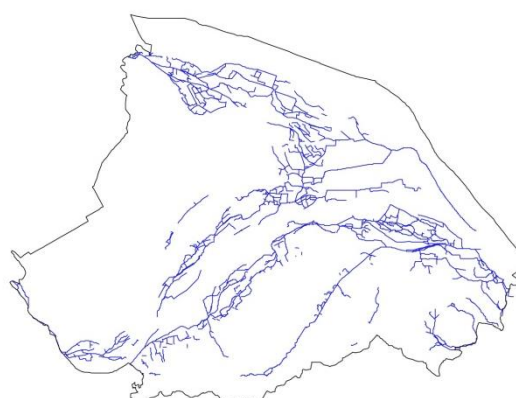
表 2-1 流水のある用水路延長

	昭和55年（1980年）	平成3年（1991年）	平成21年（2009年）
距離（km）	218	177	116

出典：用水集計表（日野市）



昭和56年（1981年）



平成17年（2005年）

図 2-7 日野市の用水路の分布変化

出典：日野市水路幹線図を基に作成

2.2.3 みどり

東京都の生物多様性地域戦略である「緑施策の新展開～生物多様性の保全に向けた基本戦略～」では、日野市は「武蔵野の自然ふれあいエリア」に該当しています。エリアの概要は以下に示すとおりですが、日野市を含む広域的なみどりの特徴を表しています。

「武蔵野の自然ふれあいエリア」の特徴

- 丘陵地の樹林は、過去に薪炭林として利用・管理されていたクヌギ・コナラ等の二次林を主体とし、スギ・ヒノキの人工林も散在する。昔ながらの景観を有する谷戸や里山は貴重な存在となっている。
- 丘陵地では豊かな住環境を有する住宅地や緑が広がっている。農業も行われる里地里山、宅地、樹林、田畑が混在し、まとまった樹林や河川敷を中心に、人の生活をうまく利用する形で生態系が成立している。

日野市内のみどりを考える場合、地形ごとに様々なみどりが形成されており、それぞれ特徴が異なります。日野台地は主に住宅地となっており、街路樹や生け垣等がまちなかのみどりを形成しています。沖積地では農地が帯状に存在し、浅川や多摩川の河川敷には草地を主体とするみどりが広がっています。日野台地と沖積地との境界には、細く長い崖線の樹林地が残っています。また、多摩丘陵にはクヌギ、コナラ等の雑木林がまとまった面積で存在します。

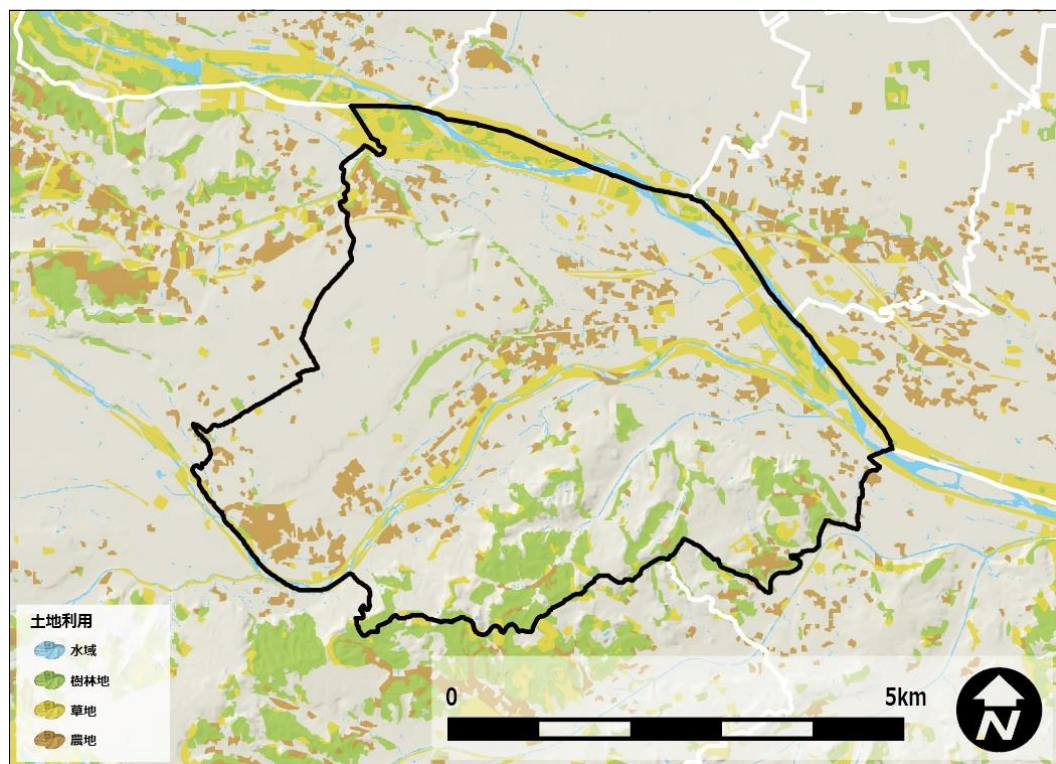


図 2-8 日野市の土地利用の分布

出典:平成 23 年度緑化計画書制度見直しのための基礎調査報告書(東京都 平成 26 年)を基に作成

図 2-9 は平成 24 年における日野市の土地利用面積を示しています。

主なみどりは森林・原野・農用地として分布しています。原野は野草地等、灌木類の生育する自然地や荒地、裸地を指しています。

自然に近いみどりである森林や原野は、野生生物の生息場所として重要な環境であるため、野生生物の生息環境を確保するためには適切に保全し、減らさないための取組みが必要です。

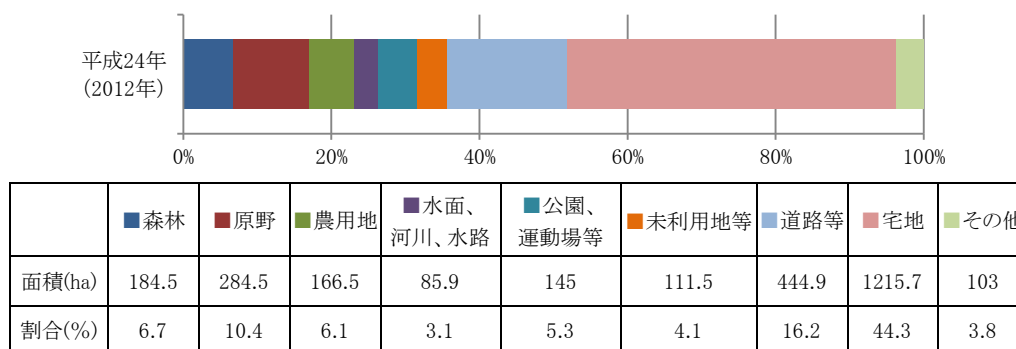


図 2-9 日野市の土地利用面積

出典: 東京の土地利用 多摩・島しょ地域(平成 24 年)

図 2-10 は昭和 60 年（1985 年）からの耕地面積の推移を示しています。

耕地面積は減少傾向が続いており、特に田はここ 20 年間で 10 分の 1 にまで減っています。生きものには、田や畑といった農地環境を好んで生息する種が多く存在します。これまで普通に見られた生きものが、これからも普通に見られるためには、農地環境の保全が課題です。

また、田の減少によって、用水はその用途が失われており、場合によっては暗渠化され、消失しています。

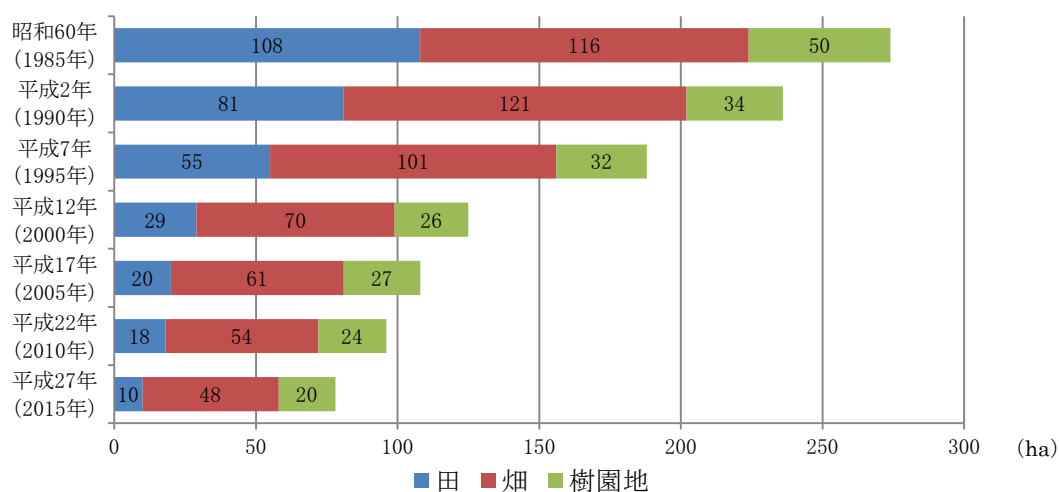


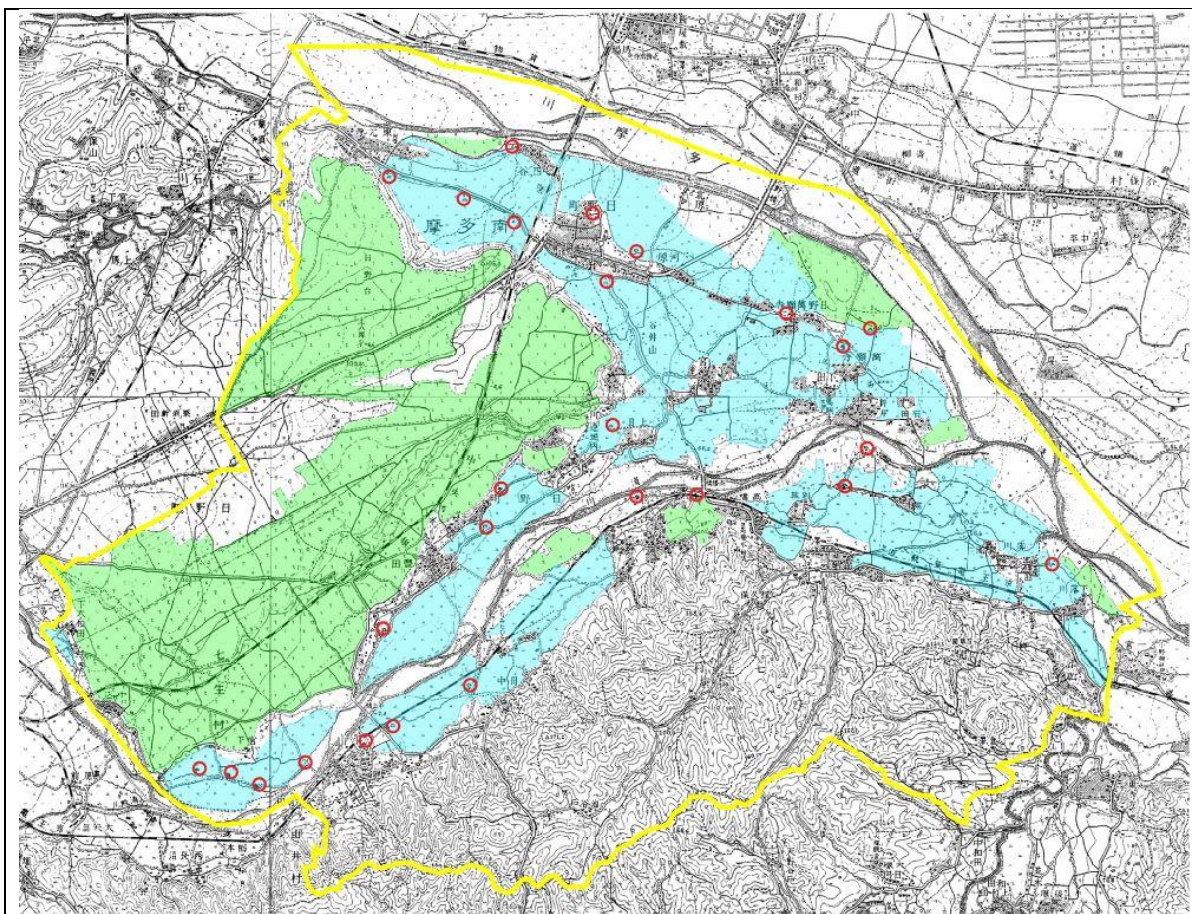
図 2-10 日野市の耕地面積

出典: 農林業センサス

2.3 土地利用の変遷

日野市は 7000 年の定住の歴史があり、江戸時代には甲州街道の宿場町として栄えていました。およそ 100 年間で大きく変化した土地利用を、地形図と航空写真、土地利用の変化が確認できる資料を用いて、過去の状況と課題の整理を行いました。

【明治期～昭和初期】戦前の農村の風景を残す「宿場町」



■ : 桑畑の分布 ■ : 田の分布 ○ : 水車

昭和 4～12 年 (1929～1937 年) の地形図

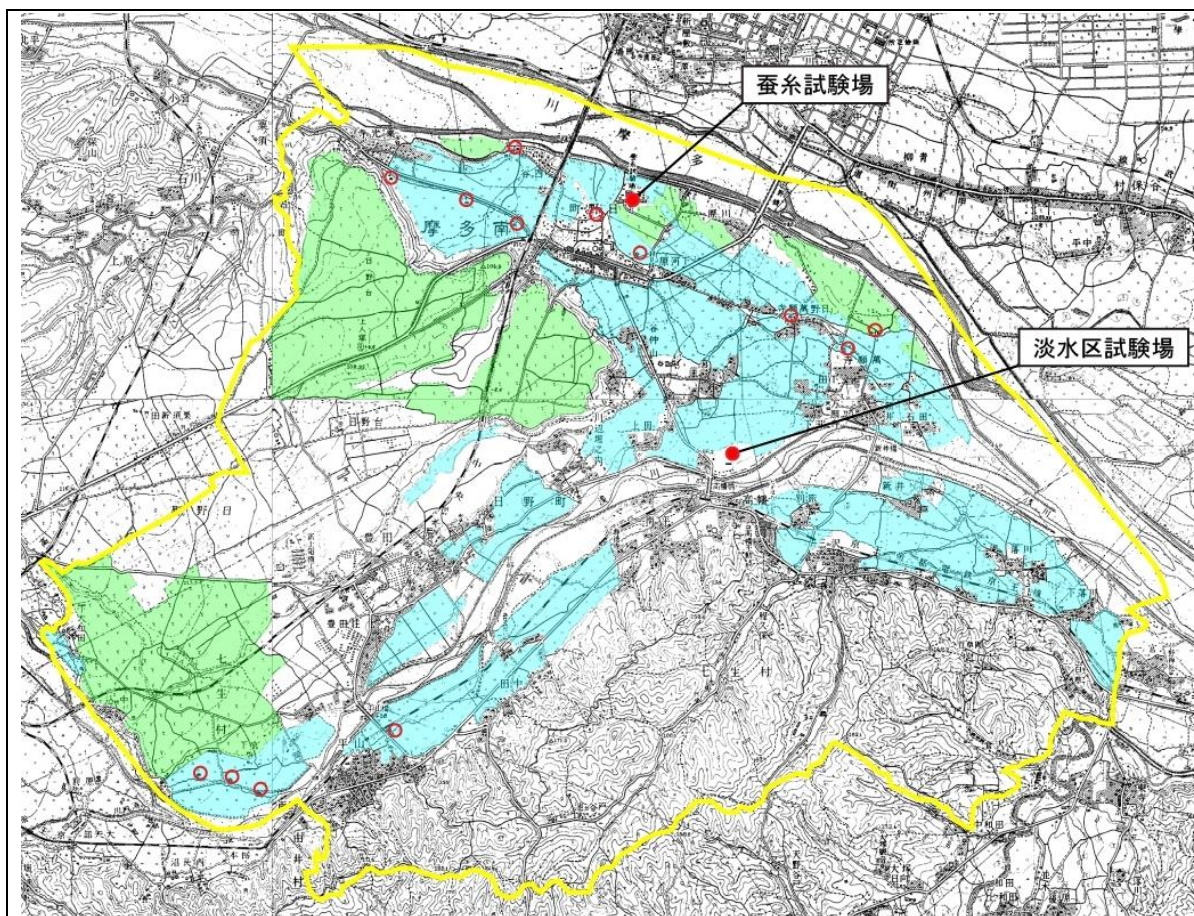
出典: 時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷 謙二)の地形図に一部追記

- ・ 日野の用水は 450 年の歴史があり、年間通水の水利権がある。
- ・ 川の産物としてアユは有名であり、江戸時代には「鮎は日野」と言われていた。
- ・ 明治 22 年 (1889 年) に中央線が、大正 14 年 (1925 年) には京王線が開通した。
- ・ 明治 34 年 (1901 年) に日野町と桑田村が合併した。
- ・ 大正時代は米・繭ともに有数の産地となり、「多摩の米蔵」と呼ばれていた。

<状況>

- ・ 台地の上に集落がなく、周辺は多くが桑畑であった。
- ・ 低地は主に田として利用されていた。
- ・ 用水の豊富な水を活かして、低地には水車が多く設置されていた。

【昭和中期】開発の始まり



■ : 桑畑の分布 ■ : 田の分布 ○ : 水車

昭和 23～29 年（1948～54 年）の地形図

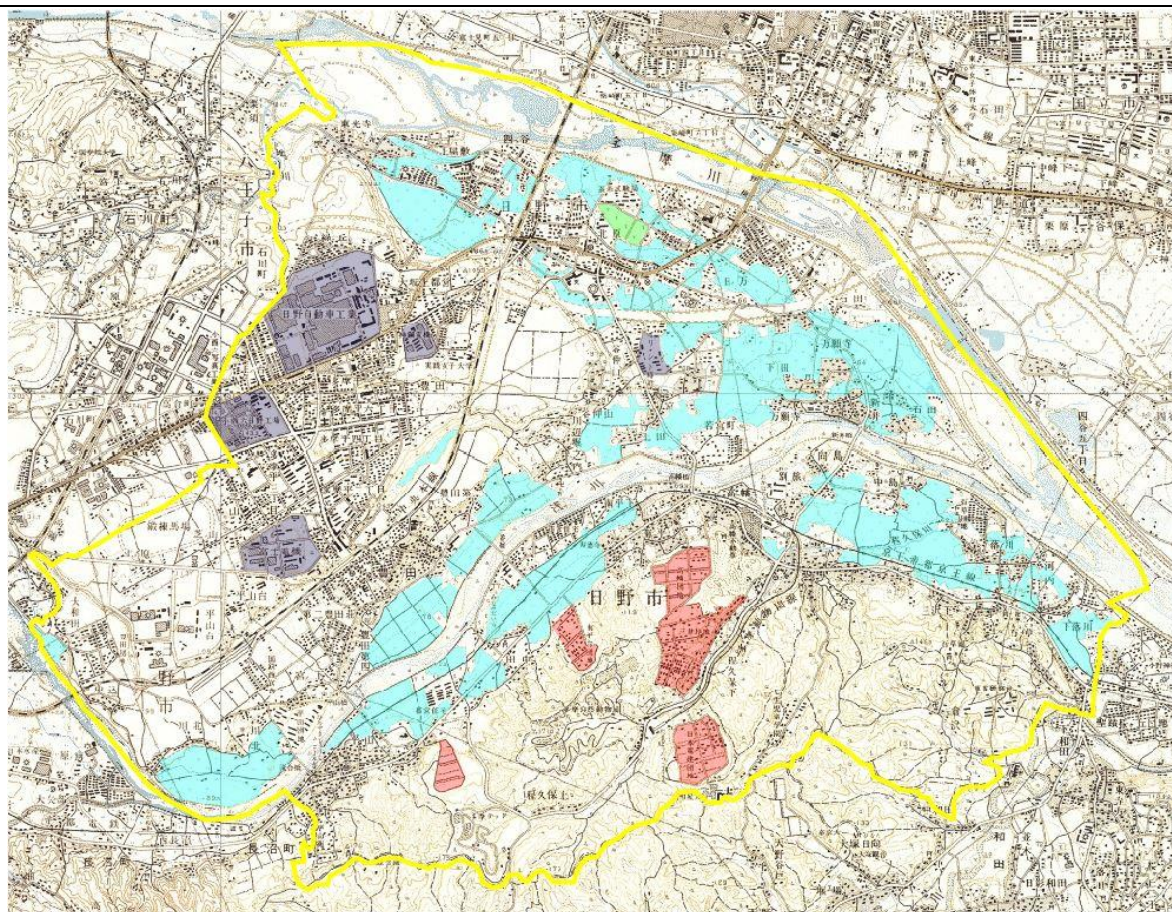
出典:時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷 謙二)の地形図に一部追記

- ・ 昭和 3 年（1928 年）には仲田に「蚕糸試験場」ができた。
- ・ 昭和 28 年（1953 年）には淡水魚の養殖等の試験を行う「淡水区試験場」ができた。
- ・ 昭和 33 年（1958 年）に日野町と七生村が合併し、新しい日野町となった。

<状況>

- ・ 台地の桑畑が拓かれ、学校や病院、工場の進出が確認できる。
- ・ 桑畑の減少は確認されるが、蚕糸試験場もあり桑畑はまだ大面積に広がっている。
- ・ 低地の市街地について、目立った拡大は確認できない。
- ・ 良質な淡水が得られる場所であったため、淡水区試験場が設けられた。
- ・ 水車の数は減少している。

【昭和後期①】日野五社を代表とする「工業都市」



■：市街地化した多摩丘陵 ■：工場の位置 ■：桑畑の分布 ■：田の分布

昭和 41 年（1966 年）の地形図

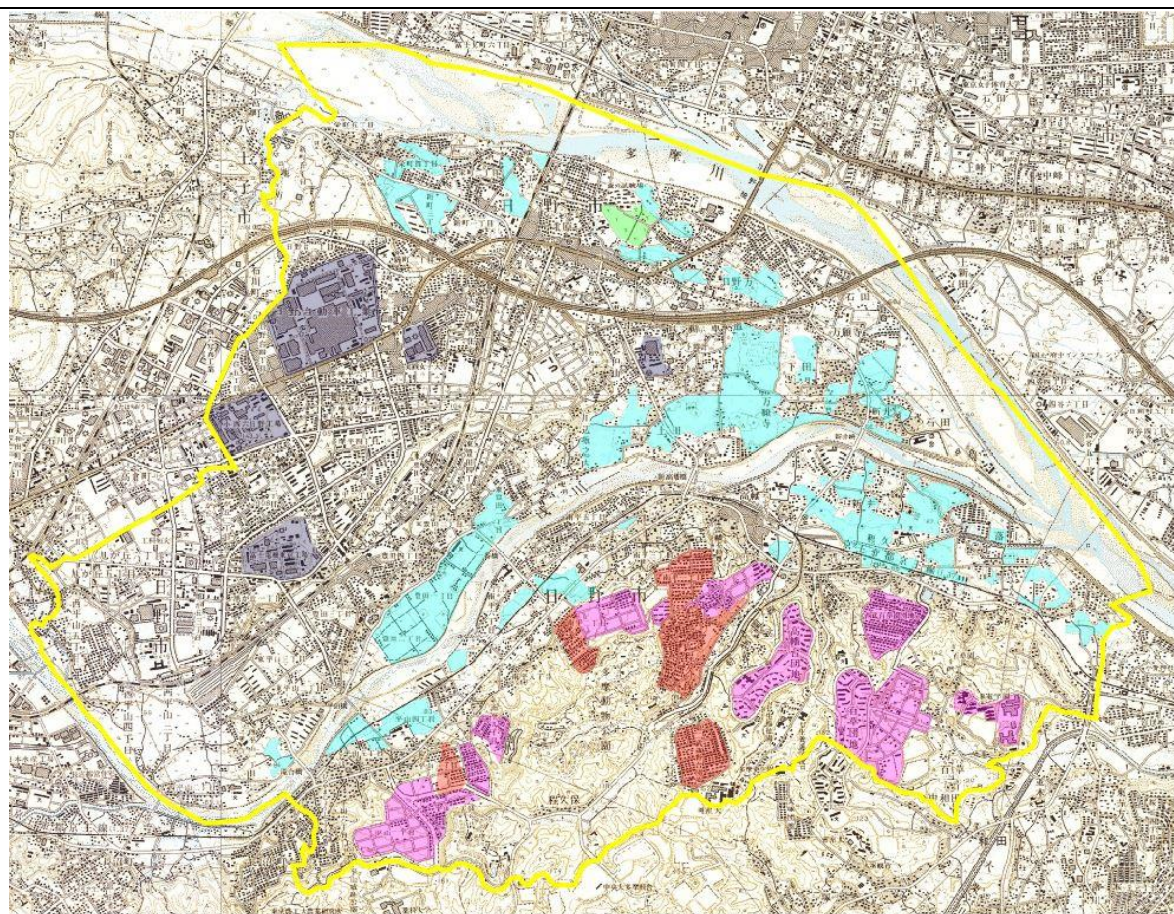
出典：時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷 謙二)の地形図に一部追記

- ・昭和 10 年前後にかけて、日野五社をはじめとする企業が日野市に進出した。
- ・昭和 38 年（1963 年）に市政が施行され「日野市」となった。
- ・昭和 35 年前後から多摩平団地をはじめ、京王平山住宅、百草・高幡台団地等が供給された。

<状況>

- ・台地の上は工場が進出し、土地区画整理や団地の供給が行われた。
- ・多摩丘陵は団地や宅地の造成のために開発がはじまった。
- ・低地の田も市街地化が進んでいる。
→【課題】日野らしい農地景観の減少
- ・昭和 41 年の地形図では桑畑はわずかに確認できる限りである。
- ・団地や宅地の立地に伴い、人口が急激に増加した（図 2-2）。

【昭和後期②】市街地化の進行



■ : 1966 年時点で市街地化した多摩丘陵 ■ : 1975 年時点で市街地化した多摩丘陵
■ : 工場の位置 ■ : 桑畑の分布 ■ : 田の分布

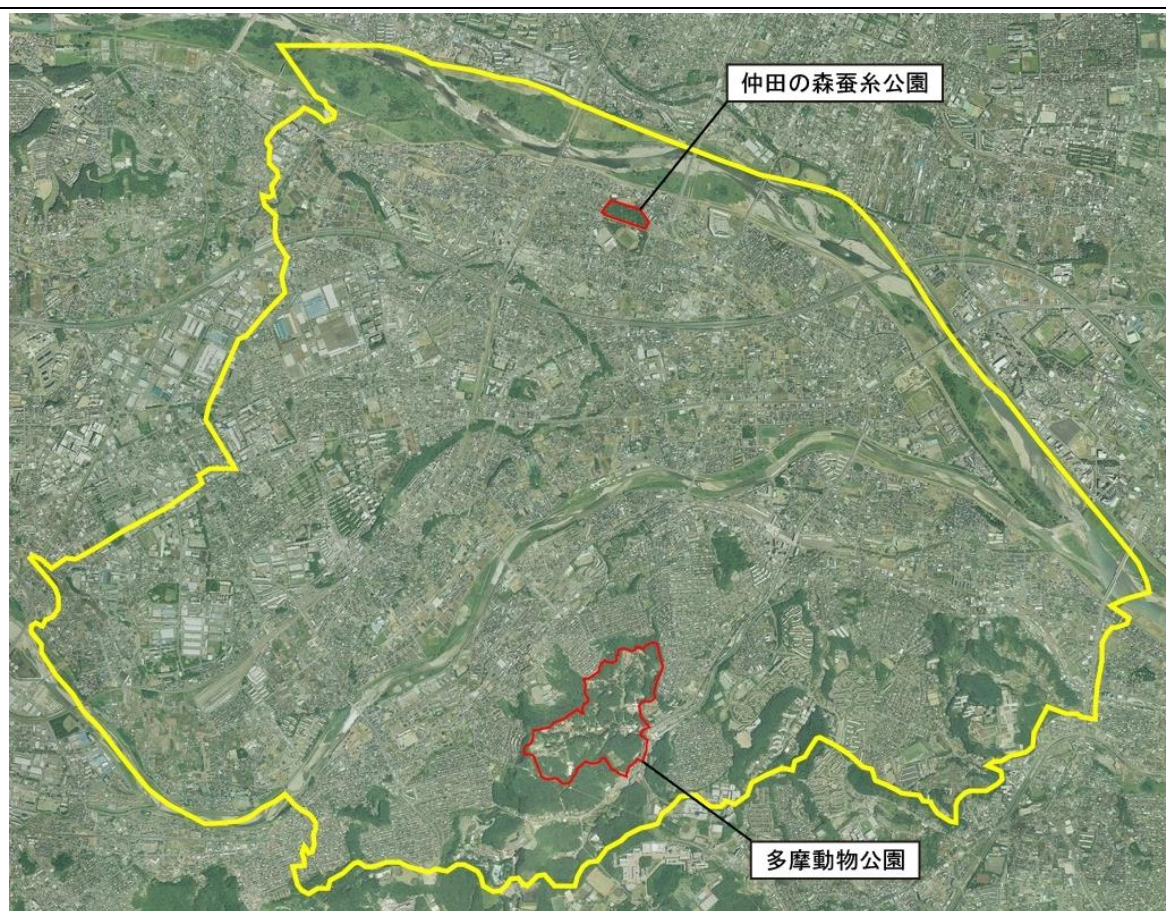
昭和 50 年（1975 年）の地形図

出典: 時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷 謙二)の地形図に一部追記

＜状況＞

- ・台地と低地で共に宅地化が進行している。
- ・多摩丘陵は団地や宅地造成のため、さらに開発が進んだ。
- ・田の減少が続いている。
- ・昭和 56 年には低地に細かく水路網が張り巡らされていた（図 2-7）。

【平成期】首都圏の「住宅都市」



平成 19 年（2007 年）の航空写真
出典：国土地理院の航空写真に一部追記

＜状況＞

- ・多摩丘陵は多摩動物公園周辺を除いて市街地化がさらに進行した。
→【課題】丘陵地の樹林環境減少
- ・多摩丘陵のみどりは分断化しつつある。
→【課題】丘陵地の分断化
- ・大きなみどりは崖線斜面、多摩丘陵、多摩川、浅川に残っている。
→【課題】みどりの軸となるエコロジカルネットワークの形成
- ・蚕糸試験場周辺は「仲田の森蚕糸公園」として緑が残されている（現在は一部、市民の森ふれあいホールとなっている）
- ・農地（田・畑）はわずかに残っている（図 2-10）。
→【課題】農地の保全
- ・用水路の延長は減少が続いている（表 2-1）。
→【課題】用水の保全・新たな利用方法の検討

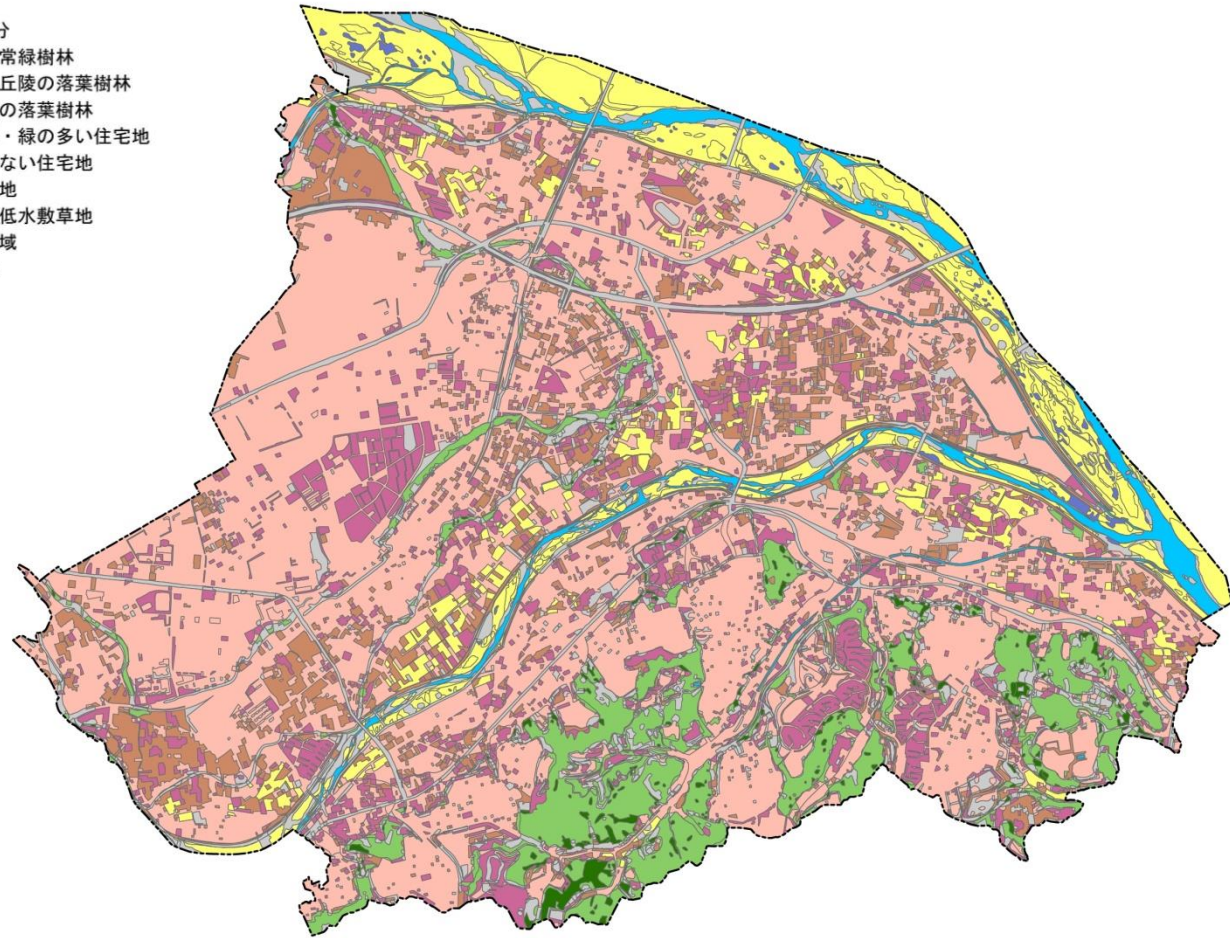
2.4 日野市の生きもの

2.4.1 日野市全体の生物相

日野市には、台地や丘陵地、河川などの地形と、樹林地や耕作地、住宅地など地形に応じた植生や土地利用により、多様な生きものの生息場所となる多様な環境があります。このような環境を大きく分類すると、以下の 8 つの生息環境区分に分けることができます。

生息環境区分

- 斜面・常緑樹林
- 斜面・丘陵の落葉樹林
- 低水敷の落葉樹林
- 果樹園・緑の多い住宅地
- 緑の少ない住宅地
- 畑・草地
- 水田・低水敷草地
- 開放水域
- 対象外



3：低水敷の落葉樹林 (8.89ha)

■特徴

河川敷に点在する樹林で、ニセアカシア林を主体としているが、ヤナギの低木林も含まれる。面積的には、小さいが河川敷にあり、生物に重要な生息環境を提供している。

いき
もの

6：畑・草地 (265.97ha)

■特徴

台地部並びに低地部におよそ 100ha 弱の畑が残っている。これらの環境は、草地性の環境に生息する生物の生息環境となっており、多様な草地環境に動物群が生息している。

いき
もの

4：果樹園・緑の多い住宅地 (294.5ha)

■特徴

農家の屋敷林や旧市街地の住宅地は良好な生物環境を提供している。丘陵地の住宅地は残存緑地のため、良好な生物の環境となっている。

いき
もの

7：水田・低水敷草地 (219.97ha)

■特徴

水田は、崖線の湧水や水路とともに低地の環境の骨格を形成している。これらは連結することにより、まとまった生態系を形成しているが、近年は急激に減少し、分断され、孤立している。

いき
もの

1：斜面・常緑樹林 (24.17ha)

■特徴

丘陵地に分布している。それほど面積は広くない。主な植生は、自然林(シラカシ林)やアカマツ林、スギ林等で希少な樹林である。

いき
もの

2：斜面・丘陵の落葉樹林 (201.94ha)

■特徴

丘陵部の斜面、台地の段丘崖に残っている。特に大規模な樹林は丘陵部にあり、段丘崖の樹林は、線状である。

いき
もの

5：緑の少ない住宅地 (1327.36ha)

■特徴

丘陵地、台地、沖積低地でそれぞれ性格の異なる住宅地がみられる

いき
もの

8：開放水面 (63.11ha)

■特徴

多摩川、浅川の水面である。これらは、水鳥を中心に他の動物にも多くの恩恵をもたらしている。

いき
もの

2.4.2 生息環境区分ごと生きもの

日野市の生きものの現況について、既存資料に基づく文献調査と、平成 27・28 年度に実施した自然環境調査によって調査を行いました。

区分 1～7 については、自然環境調査を行い、植生に基づいた生きものの生息環境ごとに調べました。区分 8 について、日野市水生生物調査の結果をはじめ、文献調査から得られた結果を活用して、水環境の生きものの現況の整理を行いました。

表 2-2 調査の分類群・方法・時期

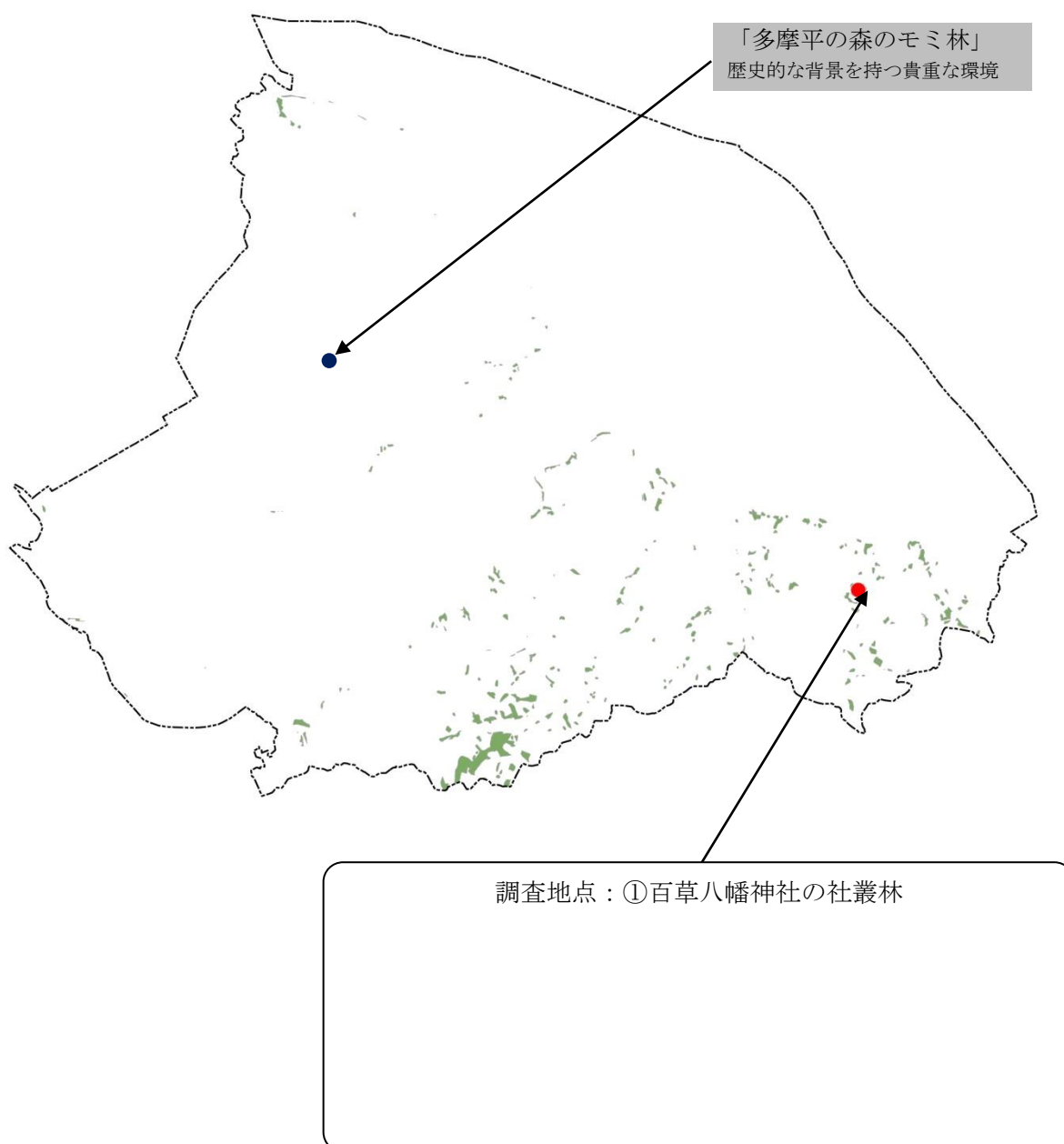
分類群	調査方法	調査時期
植物	任意踏査	3 回: 春季、夏季、秋季
哺乳類	任意踏査(目視、フィールドサイン) ※場所によって無人撮影調査	2 回: 春季、秋季
鳥類	定点観察、任意踏査(目視、鳴き声) ※調査地によってラインセンサス法	3 回: 春季(繁殖期)、秋季(渡り)、冬季(越冬期)
両生類	任意踏査(目視、鳴き声)	2 回: 春季、秋季
爬虫類	任意踏査(目視)	2 回: 春季、秋季
昆虫類	任意踏査 (見つけ採り、スウィーピング法、ビーティング法)	4 回: 春季、初夏(6 月)、夏季(8 月)、秋季
クモ類	任意踏査 (見つけ採り、スウィーピング法、ビーティング法)	1 回: 秋季
魚類	(日野市水生生物調査の結果を引用)	-
底生動物	(日野市水生生物調査の結果を引用)	-

(1) 生息環境区分 1：斜面・常緑樹林

■概要

地形	崖線斜面、丘陵地
土地利用・植生	神社の社叢林、アカマツ林やスギ林などの人工林がわずかに存在している。 多摩平の森の団地にはモミ林が残されている

■生息環境区分 1 の分布



■調査地点：①百草八幡神社の社叢林の概要

特徴	丘陵地に位置するスダジイ、シラカシ、アラカシ等が生育する常緑広葉樹林(鎮守の森)
主な植物	<p>スダジイの巨木群が特徴的に見られ、林内には、サネカズラ、ヒサカキ、アオキ、ヤブコウジといった耐陰性のある植物が生育していた。</p> <div> <div>写真</div> <div></div> <div></div> </div>
主な動物	<p>鳥類：樹林地に生息する留鳥のシジュウカラ、ヤマガラ、メジロ、ヒヨドリ、キジバト、アオゲラのほか、冬鳥のシロハラ、特定外来生物のガビチョウが確認された。</p> <p>哺乳類：様々な環境を利用するタヌキが確認されたほか、境内周辺の一部でモグラ塚が確認された。</p> <p>両生類・爬虫類：生息は確認されなかった。</p> <p>昆虫類・クモ類：朽木を利用する種、シイ・カシ類を食べる種、林床の茂みに生息する種に加え、明るい草地に生息する種が確認された。</p> <div> <div>写真</div> <div></div> <div></div> </div>

■生物多様性の保全に関する課題

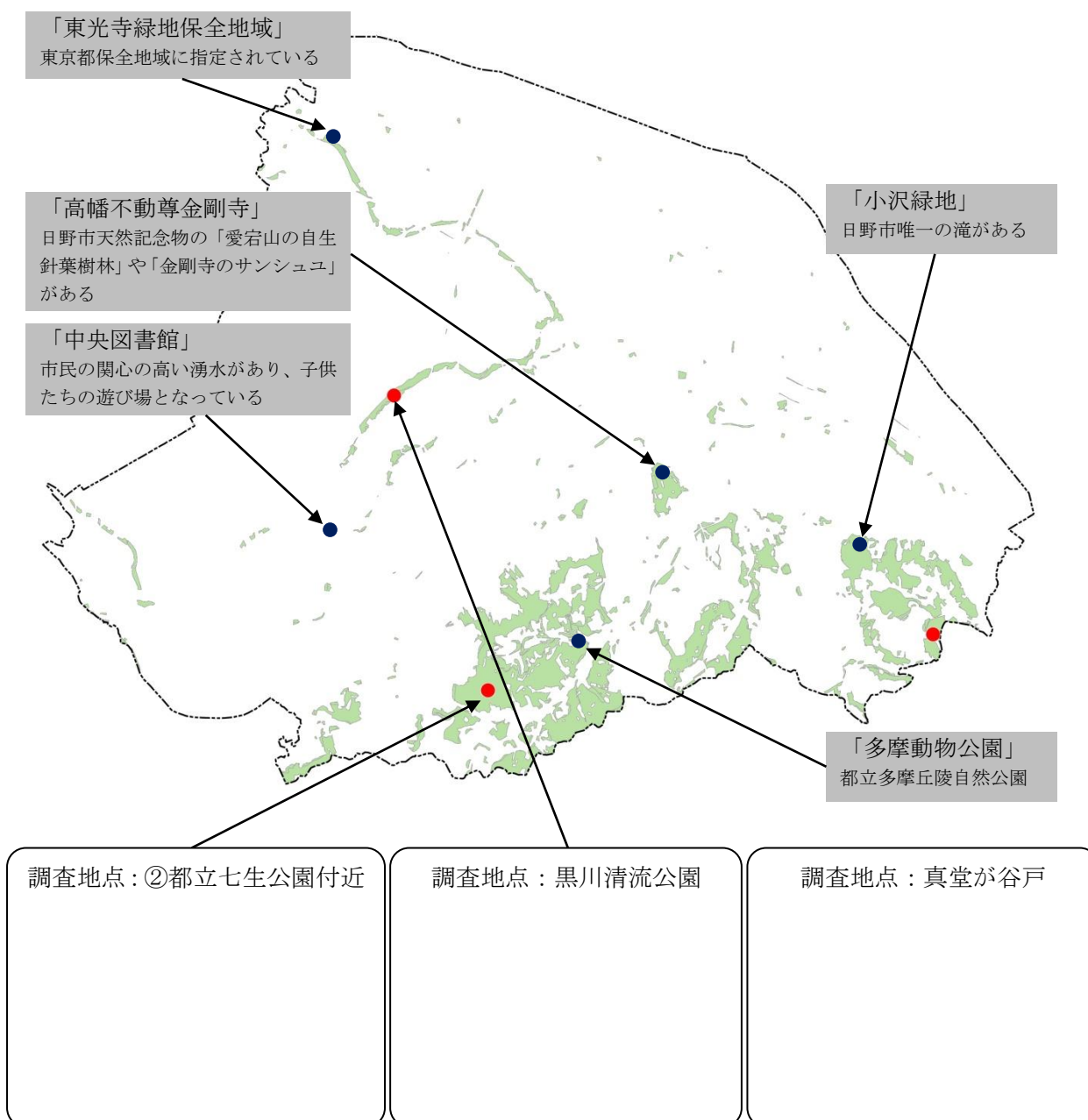
希少な樹林の保全	スダジイの巨木を中心とする発達した樹林環境は日野市内にごくわずかに残るのみで、周辺には住宅地がせまり、樹林環境が断片化・孤立化している。発達した樹林環境は日野市に残る貴重な環境であるため、適切に保全する必要がある。
民有緑地の積極的な活用	「百草のシイノキ群」等、自然に近いみどりを保全するためには、民有緑地の公有地化や管理協定、トラストの積極的な活用等、行政と市民相互の連携・協力が求められる。

(2) 生息環境区分 2：斜面・丘陵の落葉樹林

■概要

地形	崖線斜面、丘陵地
土地利用・植生	崖線斜面や丘陵地などの、造成・開発が進んでいない傾斜地に落葉広葉樹林が分布している

■生息環境区分 2 の分布



■調査地点：②都立七生公園付近の概要

特徴	丘陵地や崖線斜面に位置するクヌギ、コナラを中心とする落葉広葉樹林（雑木林）		
主な植物	アズマネザサが密生している箇所が見られたが、ベニシダ、クヌギ、シラカシ、コナラ、ヒサカキ、ガマズミといった丘陵地の樹林によくみられる植物が確認された。		
	写真		
主な動物	<p>鳥類：樹林地に生息する留鳥のシジュウカラ、コゲラ、イカルや夏鳥のカッコウ、冬鳥のアカハラ、ツグミ、ササ藪を好むウグイス、特定外来生物のガビチョウが確認された。</p> <p>哺乳類：黒川清流公園では、園路沿いでアズマモグラが確認された。七生公園では、今回調査した箇所の中で唯一、ノウサギの痕跡（糞）が確認された。</p> <p>両生類・爬虫類：湿った樹林や水辺を利用するヒバカリやアオダイショウが確認されている。斜面下部には湧水由来の水辺があるものの、両生類は確認されなかった。</p> <p>昆虫類・クモ類：雑木林のクヌギやコナラをはじめとした落葉広葉樹につく種、林床のササ類を食草とする種が確認された。</p>		
	写真		

■生物多様性の保全に関する課題

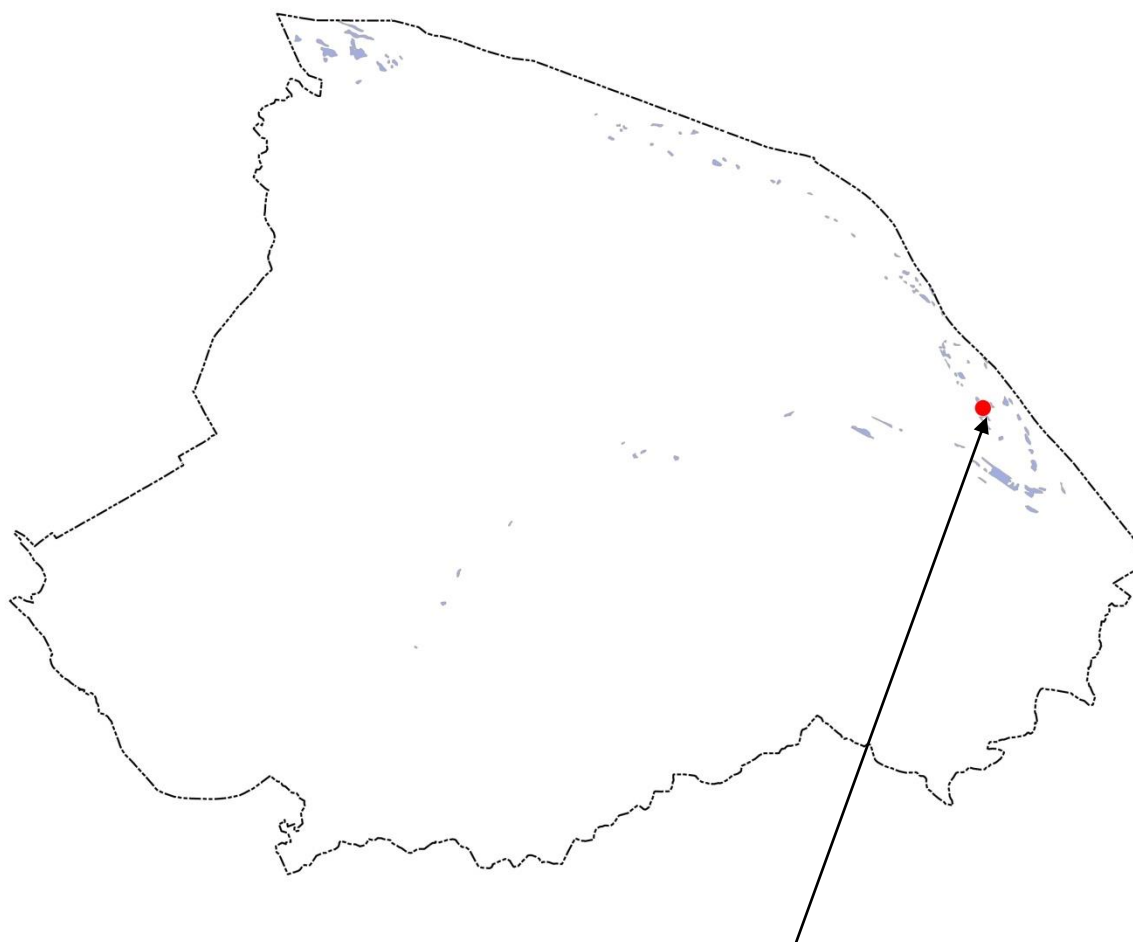
二次的自然環境の減少・劣化	丘陵地の生きものの多様性を保つには、継続的に人の手を入れることで雑木林や草地等、二次的な植生を維持することが必要である。
宅地化や相続によるみどりの減少	丘陵や崖線の樹林は日野市に残された重要なみどりである。この環境を次世代に残すためには、宅地化や相続によるみどりの減少を防ぐ必要がある。
重要種の保全	豊かな自然環境の残る真堂が谷戸では、調査で多くの重要種が確認された。これらの種が今後も健全にこの場所で生育するためには、種ごとの適切な管理と保全計画が必要である。
湧水の水量確保	湧水の水量は、季節や降水量によって変化するが、かん養域の宅地化や土地利用の変化により減少し、枯渇することが考えられるため、長期的に推移を見ながら湧水の保全を計る必要がある。

(3) 生息環境区分 3：低水敷の落葉樹林

■概要

地形	河川
土地利用・植生	多摩川の生態系保持空間に指定されている範囲に多く分布している

■生息環境区分 3 の分布



調査地点：③多摩川河川敷の樹林

■調査地点：③多摩川河川敷の樹林の概要

特徴	多摩川河川敷に成立したハリエンジュ、オニグルミ、ヤナギ類からなる落葉広葉樹林		
主な植物	<p>外来種のハリエンジュやオニグルミ、ヤナギ類といった高木が樹林を形成していた。林内にはアケビ、アオツヅラフジ、ツルマメといったつる植物が多くみられた。川側の林縁部では外来種のシナダレスズメガヤの生育も見られた。</p>		
	写真		
主な動物	<p>鳥類：樹林地に生息する留鳥のアカゲラ、ヒヨドリ、エナガ、草地に生息する留鳥のモズ、ホオジロ、水辺に生息するアオサギ、カワウ、カワセミ、セキレイ類、特定外来生物のガビチョウが確認された。</p> <p>哺乳類：オニグルミの生える周辺においてアカネズミの利用が確認された。</p> <p>両生類・爬虫類：多摩川沿いにあるワンドにおいて、特定外来生物であるウシガエルが確認された。</p> <p>昆虫類・クモ類：羽化間もない時期に樹林で生活するトンボ類、マメ科やバラ科を食草とする種、明るく広い草地に生息する種が確認された。</p>		
	写真		

■生物多様性の保全に関する課題

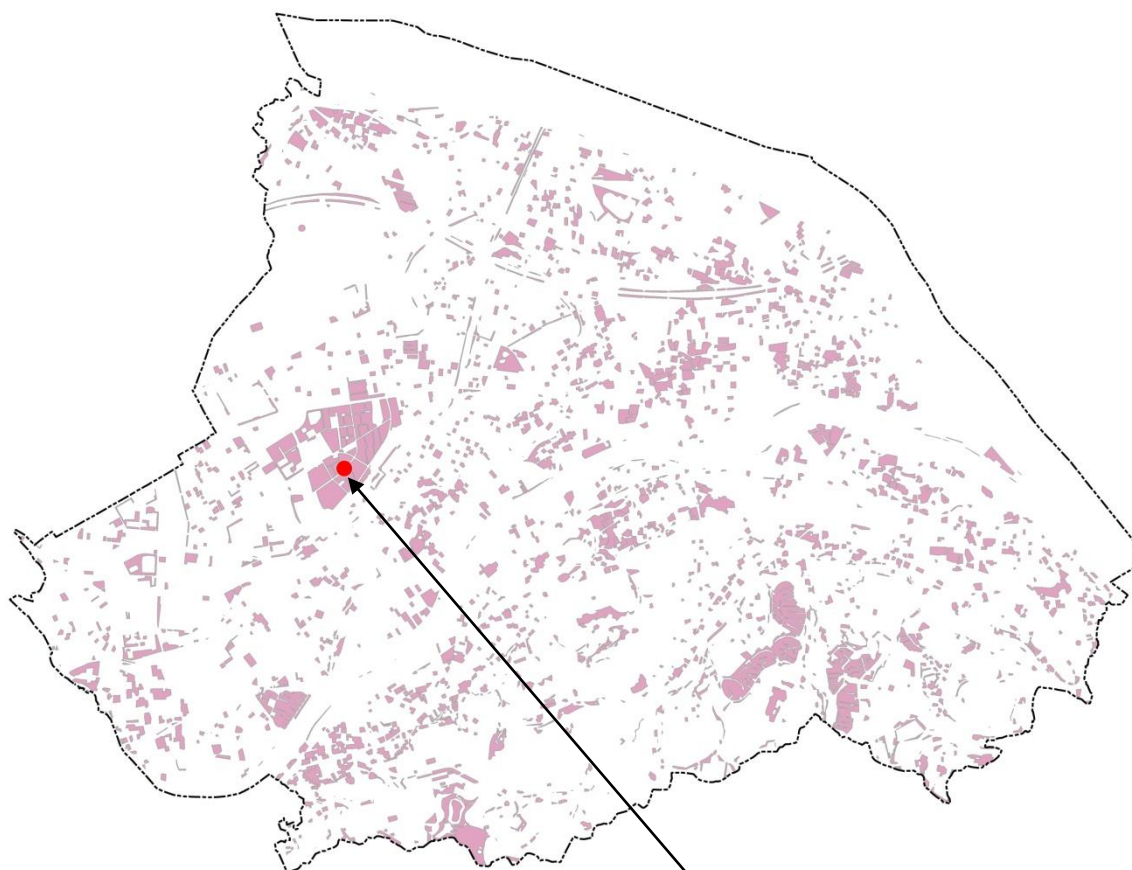
河川敷の樹林化	河川敷に点在する樹木に外来種のハリエンジュがある。ハリエンジュは拡散することで、在来の植物に悪影響を及ぼす恐れがある。生態系を保全するためには防除を行う必要がある。
礫河原の劣化	樹林や乾性草地の拡大によって、礫河原とそこに特徴的に生育・生息する生きものが減少していくおそれがある。特に、シナダレスズメガヤの生育量が増えると、冠水時に砂が堆積し、礫河原が砂の多い河原へ改変される可能性がある。

(4) 生息環境区分 4：果樹園・緑の多い住宅地

■概要

地形	丘陵地、台地、沖積低地
土地利用・植生	計画的に緑が残され、植栽が行われた団地にまとまった分布が存在する。 果樹園はブルーベリー畑等に利用されている。

■生息環境区分 4 の分布



調査地点：④多摩平の森の団地植栽

■調査地点：④多摩平の森の団地植栽の概要

特徴	台地上の住宅地周辺の植栽樹林群や芝生草地
主な植物	<p>団地外構には、下草が低く刈り込まれた植栽地や芝生草地が広がり、草丈の高い草本類は少ない一方、園芸植物や低茎の外来植物が多く生育していた。</p> <div> <div>写真</div> <div></div> <div></div> </div>
主な動物	<p>鳥類：人家周辺に生息する留鳥のスズメ、ハクセキレイ、樹林地にも生息する留鳥のヒヨドリ、コゲラ、冬鳥のジョウビタキ等が確認された。</p> <p>哺乳類：生息は確認されなかった。</p> <p>両生類・爬虫類：低茎草地の環境においてカナヘビが確認された。局所的な草地がこれらの動物のコリドーとして利用されていた。一部刈り残す場所を設ける等、生息の場を増やす工夫が望まれる。</p> <p>昆虫類・クモ類：人家周辺や明るい草地に生息する種や植栽樹木を利用する種が確認された。</p> <div> <div>写真</div> <div></div> <div></div> </div>

■生物多様性の保全に関する課題

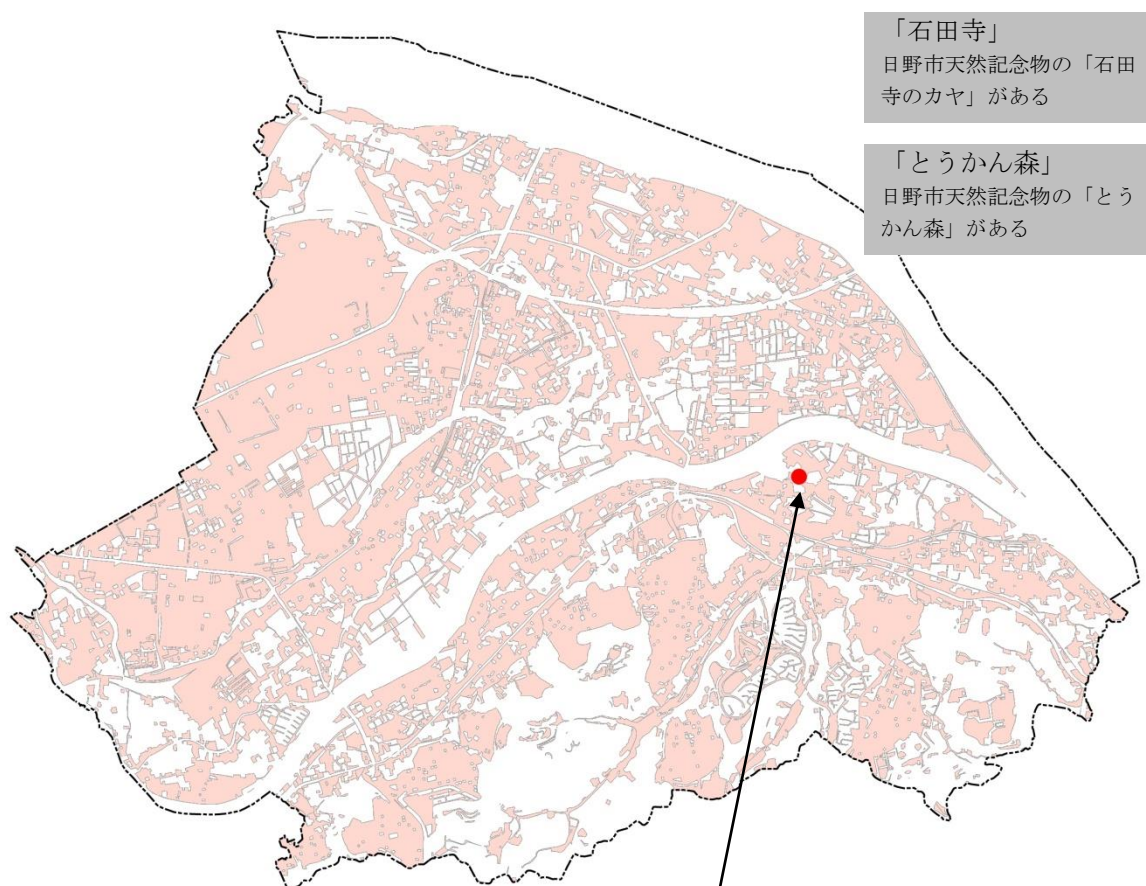
単調な緑地管理の改善	芝生をはじめとする草地は一様に低く刈り取られることで、植栽環境が単純になっており、生育・生息する生きものが少ない。生きものへ配慮する観点からは、画一的な管理ではなく、そこに生息する生きものの生態に合わせた緑地管理が必要である。
民有地の緑の保全	巨樹・巨木、屋敷林、檜ぐね、社寺林等は民有地における歴史的価値のあるみどりであり、市民とともに保全や活用の方策について検討することが望まれる。

(5) 生息環境区分 5：緑の少ない住宅地

■概要

地形	丘陵地、台地、沖積低地
土地利用・植生	住宅地や工場として利用されている。最も自然度の低い植生をもつ生息環境区分

■生息環境区分 5 の分布



調査地点：潤徳小学校ビオトープと向島親水路

■調査地点：潤徳小学校ビオトープと向島親水路の概要

特徴	浅川から取水した向島用水を利用した学校ビオトープの環境		
主な植物	<p>水路内やその周辺の湿った立地では、タチヤナギ、ハンノキ、ミゾソバ、セリといった湿性植物が見られた。また、水路内に特定外来生物であるオオカワデシヤが確認された。</p>		
	写真		
主な動物	<p>鳥類：水辺に生息するカワセミ、カルガモ、樹林に生息する留鳥のキジバト、オナガ、シジュウカラ、耕作地等草地に生息するモズ、特定外来生物のガビチョウが確認された。</p> <p>哺乳類：樹林から水辺まで様々な環境を利用する、タヌキやハクビシン、アライグマ等が確認された。親水路は浅川とつながっており、移動経路として重要であり、採餌の場としても利用していると考えられる。</p> <p>両生類・爬虫類：水田や用水路に生息するトウキョウダルマガエルが確認された。</p> <p>昆虫類・クモ類：緩やかな流水域に生息する種、湿生植物を利用する種、水辺を生息環境として好む種のほか、植栽樹木の害虫が確認された。</p>		
	写真		

■生物多様性の保全に関する課題

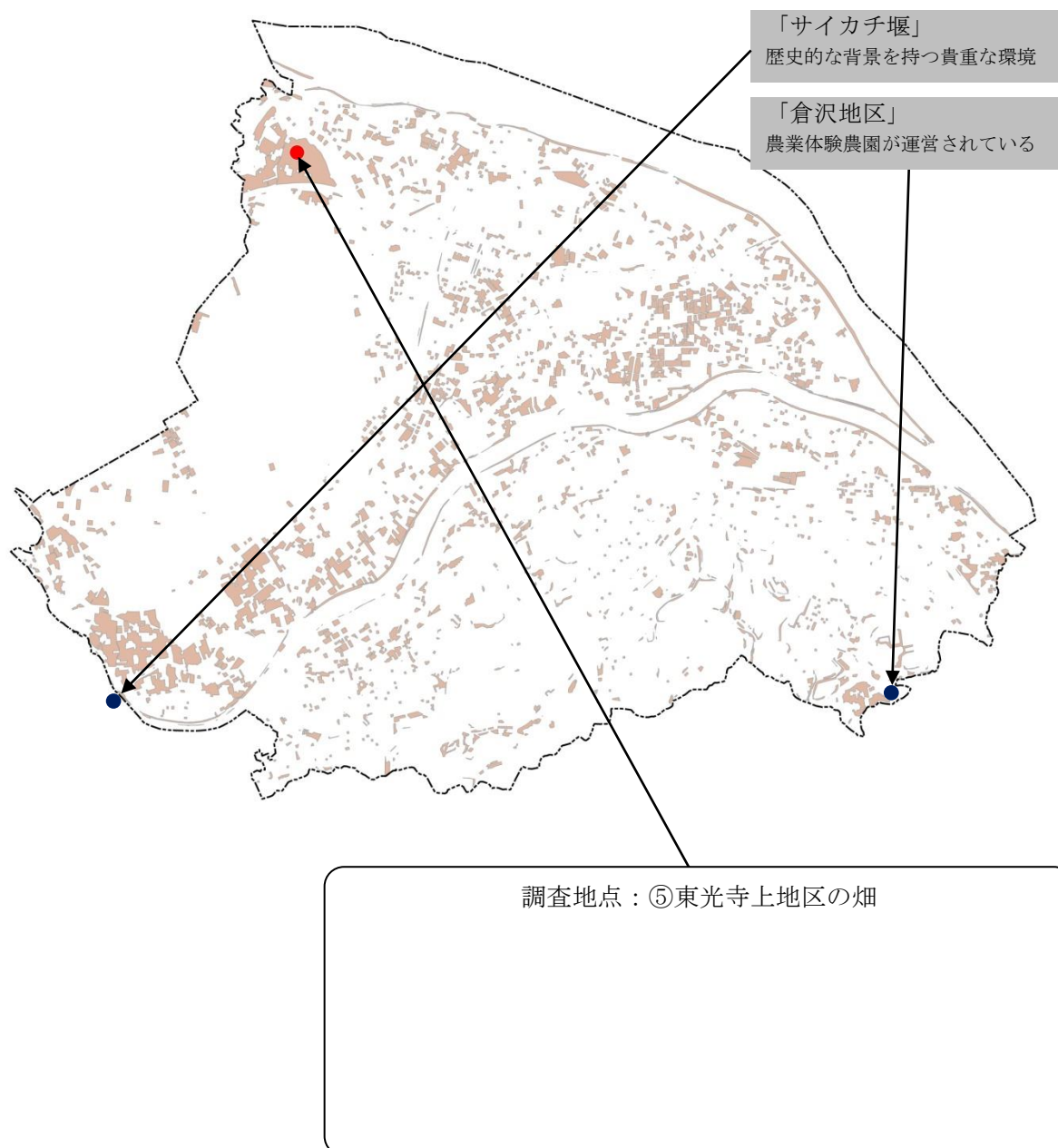
用水の維持管理の担い手	稲作の衰退と共に、用水を維持管理する主体が代わってきている。近隣住民を中心とした用水守制度が活用され、ボランティアによる維持管理が行われているが、日ごろ用水とかかわりのない市民も用水との結びつきを強め、市民全体で用水を守る体制が望まれる。
環境用水の将来的な利用	農業としての用途が失われた用水は環境用水として利用されているが、安全面や衛生面での課題も残っている。環境用水としての利用価値を高める等、将来的に用水を利用する方法を考える必要がある。

(6) 生息環境区分 6 : 畑・草地

■概要

地形	台地、沖積低地
土地利用・植生	主に畑地に分布している。畑地の植生は、農作物以外はほとんどが畑地雑草であり、除草等で人為的に管理されている。

■生息環境区分 6 の分布



■調査地点：⑤東光寺上地区の畑の概要

特徴	台地上の耕作地周辺の草地環境		
主な植物	ススキ等の高茎草本や、スベリヒユ、シロザ、ナズナ、トキンソウ、ハハコグサといった畑地によくみられる植物が生育していた。		
	写真		
主な動物	<p>鳥類： 人家周辺に生息する留鳥のスズメ、ムクドリ、ハクセキレイ、耕作地等草地に生息する夏鳥のヒバリ、冬鳥のツグミ等が確認された。</p> <p>哺乳類： 畑上にキツネの足跡が確認された。周辺の樹林や草地とつながる畑を狩場や移動経路として利用していると考えられる。</p> <p>両生類・爬虫類： 生息は確認されなかった。</p> <p>昆虫類・クモ類： 作物を食草とする種や明るい裸地を利用する種が確認された。</p>		
	写真		

■生物多様性の保全に関する課題

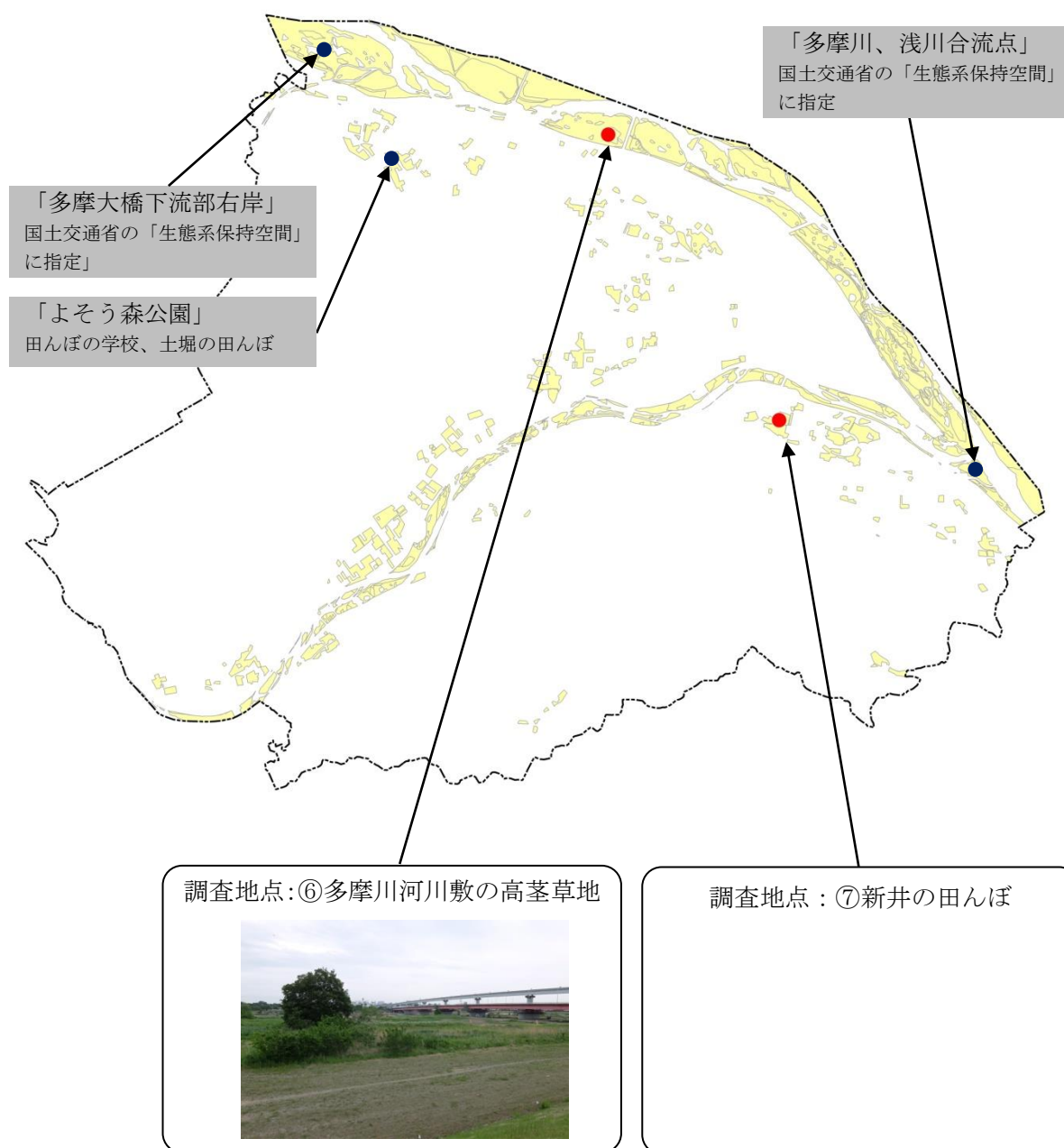
農地の減少・断片化	農業は産業の場であるだけでなく、古くから親しまれてきた日野市の風景を形成し、動植物の生息・生育空間でもある。生産の場としてだけでなく、多面的な利活用によって、農地減少をくい止めることが望まれる。
農業者の高齢化や後継者不足	相続の発生や農業従事者の高齢化を背景に農地は減少を続けている。農地保全の取組み、農業に従事する人材の育成により、農と共存するまちの形成が望まれる。

(7) 生息環境区分 7：水田・低水敷草地

■概要

地形	崖線斜面、丘陵地
土地利用・植生	水田や河川の高水敷に分布している。水田の植生はイネおよび湿地をこのむ雑草が中心である。高水敷は場所によって高茎草地と低茎草地が分布している。

■生息環境区分 7 の分布



■調査地点：⑥多摩川河川敷の高茎草地および⑦新井の田んぼの概要

特徴	低地の水田及び多摩川河川敷の湿性植物、乾性植物からなる草地環境		
主な植物	<p>水田周辺は、アゼナ、コナギ等の湿性植物が特徴的に見られた。多摩川河川敷では、アレチウリ、オオカワヂシャ、シナダレスズメガヤ等、生態系に悪影響を及ぼす外来植物が多く確認された。</p> <div> <div>写真</div> <div></div> <div></div> </div>		
主な動物	<p>鳥類：人家周辺に生息するスズメ、夏鳥のツバメ、草地に生息するホオジロ、モズ、水辺に生息するサギ類、カモ類、セキレイ類、特定外来生物のガビチョウが確認された。</p> <p>哺乳類：樹林から水辺まで様々な環境を利用する、タヌキやハクビシンが確認された。用水路や河川沿いの草地等を移動経路・採餌の場として利用していると考えられる。</p> <p>両生類・爬虫類：新井の田んぼでは水田等に特徴的に生息するトウキョウダルマガエルが確認された。</p> <p>昆虫類・クモ類：ナガコガネグモ等、湿性草地に生息する種や、ショウリョウバッタモドキ等まとまったイネ科高茎草地を生息地とする種が確認された。</p> <div> <div>写真</div> <div></div> <div></div> </div>		

■生物多様性の保全に関する課題

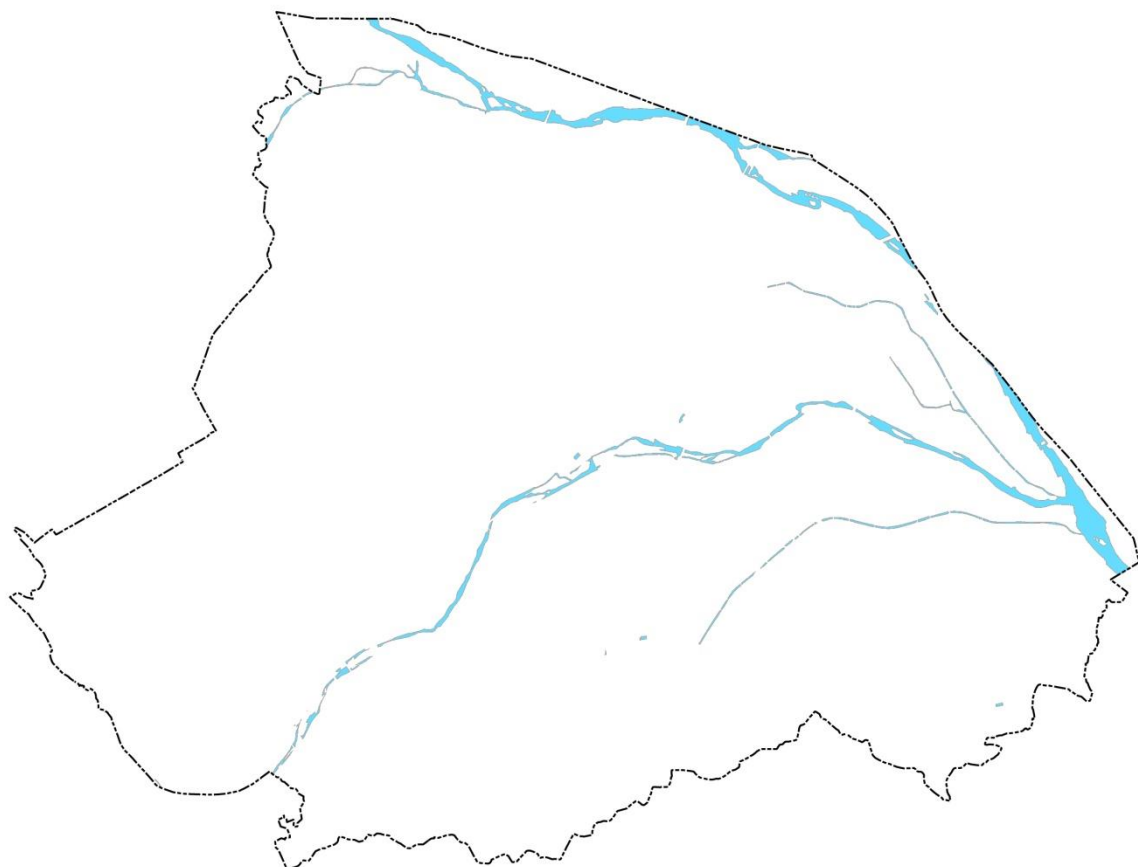
外来植物の繁茂	多摩川河川敷では多くの外来植物の繁茂が確認された。特定外来種をはじめ、シナダレスズメガヤの繁茂等、河川生態系に悪影響を及ぼすことが懸念される事象があり、早急な対策が求められている。
水田の減少	昭和 60 年に 108ha あった水田は、現在では 20ha 未満となっている。水田の減少によって、水田を生息環境とする種の減少が懸念される。防災、環境、食育等、農地の多面的機能の再認識と合わせて減少を防ぐ必要がある。

(8) 生息環境区分 8：開放水面

■概要

地形	河川
土地利用・植生	季節による水位変動はあるものの、水面となる河道の位置に大きな変化はない

■生息環境区分 8 の分布



■既存の文献調査による魚類と底生動物の特徴

主な魚類	<p>河川：早瀬に生息するアユ、カジカ、早瀬から淵まで広く利用するウグイ、平瀬に生息するオイカワ、ニゴイ、カマツカ、シマドジョウ、ギバチ、コクチバス、淵や水際の水生植物帯に多いコイ、ギンブナ、モツゴ、タモロコ、ナマズ、ミナミメダカ、ジュズカケハゼ、湧水流に生息するホトケドジョウなどが確認されている。</p> <p>用水：繁殖期には用水を経て水田へも遡上するコイや、平瀬の砂礫底に多いオイカワ、清冽な小河川の淵に多いアブラハヤ、水生植物の繁茂する場所を好むタモロコ、泥底を好むドジョウ、平瀬の砂底を好むシマドジョウ、静水域を好む特定外来生物のオオクチバスなどが確認された。</p>
主な底生動物	<p>河川：河床や水際等を遊泳するフタバコカゲロウ、ウデマギリコカゲロウ、キベリマメゲンゴロウ、瀬の石礫間で網状の巣をつくり、流下してくるデトリタス(有機残渣)を食べるシマトビケラ属の一種やウルマーシマトビケラ、石礫上を匍匐するヒラタドロムシ、水生植物の根際に多いヌカエビやスジエビ、海と行き来するモクズガニなどが確認されている。</p> <p>用水：水底の石面上やコンクリート上を匍匐するアメリカツノウズムシ、サンカクアタマウズムシ科の一種、コシダカヒメモノアガイ、チリメンカワニナ、タニガワカゲロウ属の一種、砂礫や砂泥のなかに潜っているシジミ属の一種やマメシジミ属の一種、ミズミズ科の一種、ヒゲユスリカ属の一種、エリユスリカ亜科の一種、瀬の石礫間で網状の巣をつくり、流下してくるデトリタス(有機残渣)を食べるウルマーシマトビケラやコガタシマトビケラ属の一種、砂粒等で筒形の巣をつくるヒメトビケラ属の一種、水生植物の根際に多いカワリヌマエビ属の一種、ヌカエビ、スジエビ、アメリカザリガニ、海域と行き来するモクズガニなどが確認された。</p>

■生物多様性の保全に関する課題

程久保川での自然環境調査	丘陵地を流れる程久保川では文献調査が確認できなかった。そのため、源流部一帯も含めて調査を実施し、魚類相・底生動物相をより詳細に把握することが望まれる。
水源となる樹林の保全	崖線斜面は水の供給源として、魚類にとって非常に重要な場所である。崖線斜面の斜面林を保全することで、湧水量を維持し、下流側である多摩川水系一帯の生物多様性の維持・向上に努めることが重要である。
人為放流による悪影響の普及啓発	住宅地に近い用水では、人為放流に起因すると考えられる種が確認された。人為放流は在来種へ悪影響を与え、生態系をかく乱する恐れがあるため、禁止するように普及啓発を行う必要がある。
魚類のすみやすい環境整備	魚類の多様性をより向上させるためには、河川から用水全域にわたる移動障害（堰や落差工）の位置や用水の形状を網羅的に把握し、必要に応じて用水の構造を改善することが望まれる。
抽水植物帯の創出	抽水植物はトンボ類の羽化場所として機能することや、堆積物の流下防止、水質浄化、底生動物の繁殖環境、増水時の避難場所等、生物多様性を維持・向上させるための様々な機能を備えているため、場所に応じて生育場所を設置することが望まれる

3. 基本的事項

3.1 位置づけ

「日野市生物多様性地域戦略」は関連する国や都の関連法令や計画との整合を図りつつ、日野市の多分野にわたる既存計画に基づき、“生物多様性”の視点から「実行」に重点をおいた部門横断的な計画です。

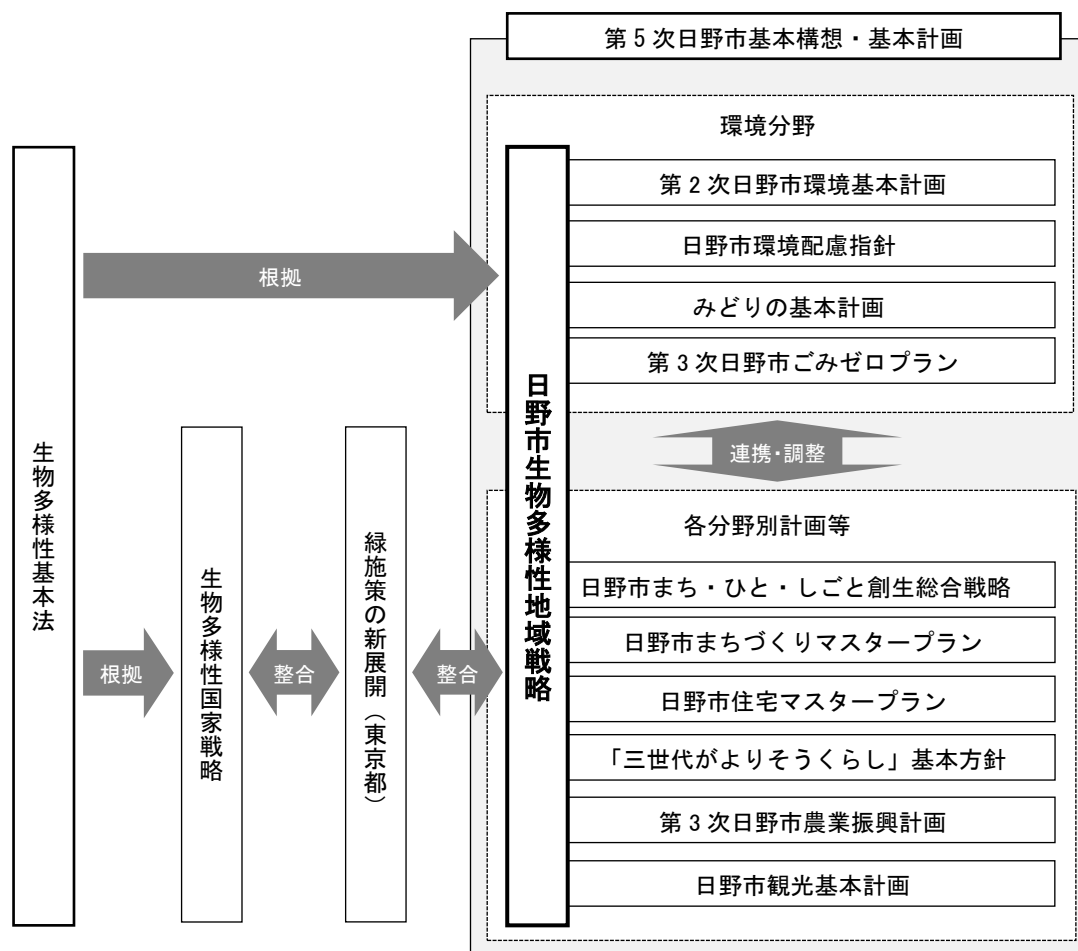


図 3-1 日野市生物多様性地域戦略の位置づけ

3.2 対象区域

日野市全域。

3.3 計画期間

目標年：2028年（20年計画の場合）

3.4 基本理念

日野市生物多様性地域戦略における将来的な理想像として、基本理念を以下のとおり定めました。

水とみどりを継承し、人と多様な生きものが共に暮らせるまち

3.5 基本方針

基本理念に沿った施策の体系化のために、3つの基本方針があります。その内容は以下のとおりです。

・人々の関心を高める

身近に自然を感じることでできる体験を通して、多くの人に日野市の生物多様性を伝え、関心を高めます。日野市の豊かな生物多様性を市民の共通認識とすることで、みんなで力を合わせて生物多様性を支える機運を高め、活動の活性化を図ります。

・人と自然の関わりをつくる

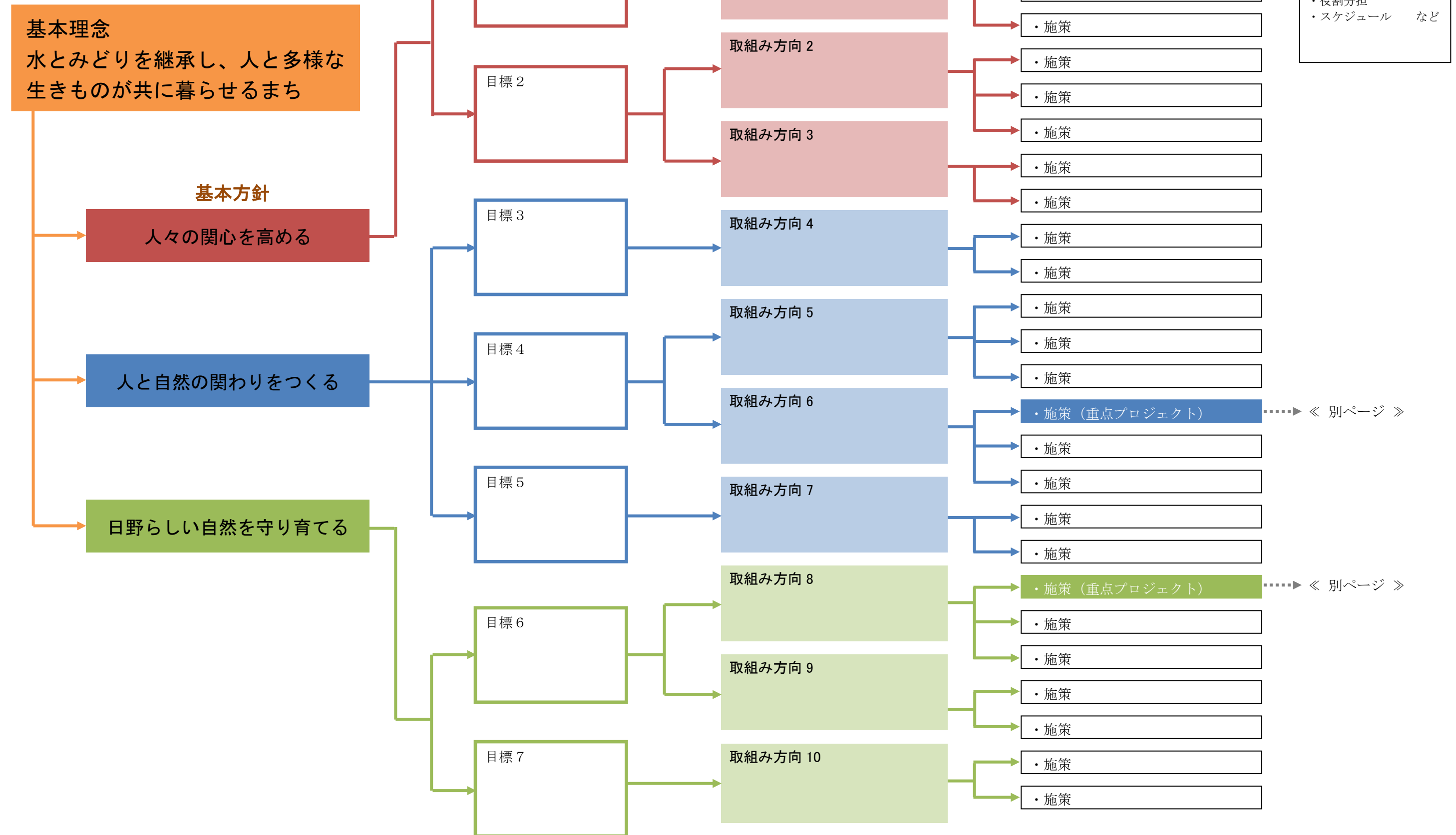
生物多様性には里山のように、人が積極的に自然と関わることで生み出される価値があります。そのような人と自然が共生することで得られる自然の恵みを未来に継承し、持続可能性に考慮した人と自然の関わりを形成します。

・日野らしい自然を守り育てる

崖線に残されたみどり、丘陵地の雑木林、低地に張り巡らされた用水路、多摩川と浅川の河川環境が育む動植物等、日野市の生物多様性は、特徴的な地形が由来となつて生み出されています。そのような日野らしい自然環境を残すために、今ある生物多様性を守り育てます。

4. 生物多様性地域戦略の取組み

4.1 取組みの体系



4.2 主体の整理

取組みの方向ごとに関連する主体を整理します

4.3 それぞれの取組みについて

4.3.1 取組みの方向：1-1. 日野の未来を創る人を育成（仮）

取組みの内容（仮）

日野市の豊かな生物多様性を多くの人が理解し、大切にする意識を共有できるように、環境学習の体制を整えます

現況・課題

- ・ 日野市の現状、背景、取組みが必要である理由や課題の概要を整理します
- ・
- ・
- ・

各主体の役割

<〇〇〇>

- ・ 各主体の役割を整理します
- ・
- ・

<〇〇〇>

- ・
- ・
- ・

<〇〇〇>

- ・
- ・
- ・

<〇〇〇>

- ・
- ・
- ・

具体的な取組み

- ・ 具体的な取組みの内容を列挙します
- ・
- ・
- ・
- ・

施策

- ・ 具体的な施策を列挙します
- ・
- ・
- ・
- ・

担当

- ・ それぞれの施策を実施する担当を整理します
- ・
- ・
- ・
- ・

市が推進する既存の関連計画

- ・ それぞれの施策を実施する担当を整理します
- ・
- ・
- ・
- ・

4.4 重点プロジェクト

4.4.1 重点プロジェクト 1

各重点プロジェクトについて整理します。

- ・プロジェクト名
- ・内容
- ・役割分担
- ・スケジュール など

重点プロジェクトについて

<考え方>

何を「重点」とするか？

- ・短期目標までに先導的に実施し、中期目標に向けた行動につなげていく取組み
- ・主体ごと（市・市民・事業者など）に率先してできる取組み
- ・基本方針ごとに優先して実施していく取組み
- など

重点プロジェクトをどのように設定するか？

- ・施策の中から選択的に取り上げる方法
- ・施策とは別枠で設定する方法
- など

<重点プロジェクトの例>

①子供向けの生物多様性教材づくり

概要：子供が学校で使用するための生物多様性を学ぶ教材づくり

②カワセミエコミュージアムの推進

概要：カワセミハウスを中核拠点として、市内各地で活動する様々な市民団体をつなぐネットワークの形成を促します

③市民生きもの調査

概要：市民主体で、河川や緑地の生きもの調査を実施する。調査の結果は生物相の現状として整理し、生物多様性の観点から問題点が見つかった場合は、管理者へ改善策の提言を行う

④日野市侵略的外来種リスト（ブルーリスト）の作成

概要：日野市で問題となっている外来種の選定を対策の検討

5. 推進体制と進行管理

5.1 推進体制

戦略の取組みを推進していくための体制を整理します

- ・推進体制のイメージ図 など

5.2 進行管理

戦略の進行管理と評価などについて整理します

- ・PDCA サイクルによる進行管理のフロー
- ・スケジュール など